HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | ソヴィエト・ロシアにおける史跡・文化財保護運動の展開 : 情熱家から「社会団体」VOOPIKに至るまで |
| Author(s) | 高橋, 沙奈美 |
| Citation | スラヴ研究, 60, 57-90 |
| Issue Date | 2013-06-15 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/56915 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | SS60_003.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# ソヴィエト・ロシアにおける史跡・文化財保護運動の展開

## ―― 情熱家から「社会団体」VOOPIK に至るまで ――

高　橋　沙奈美

### はじめに

ロシア正教会の丸屋根は、ロシアの文化や歴史を想起させるシンボルとしてしばしば用いられる。しかしながら現在のロシアで、正教会の名刹、あるいは文化遺産、観光名所として知られる歴史的な教会建築のほとんどが、第二次大戦後のソ連において国の保護管理の下、修復されたことはあまり知られていない。民族ではなく階級による統合を謳った多民族国家ソ連において、革命以前のロシアが遺した文化財の芸術的・歴史的価値が公的に認められるまでのプロセスは、決して容易なものではなかった。さらに無神論を標榜していたソ連において、宗教施設として閉鎖された後の教会建造物が史跡として認められた場合、それをソ連文化の文脈でいかに利用するかという問題も一筋縄ではいかないものであった。本論は宗教的文化財の保護を可能にした社会的変化に注目しながら、ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国（RSFSR、以下「ロシア共和国」と略）における史跡・文化財保護運動の展開について検討する。なお、本論で言及する史跡・文化財としての教会建築については、ロシア正教のものに論点を絞る。

1920–30 年代のソヴィエト・ロシアでは、ロシア正教会の殲滅を目指した反宗教政策によって、教会や修道院が次々に閉鎖された。あるものは農業施設や博物館・図書館といった啓蒙施設などの世俗目的に利用され、あるものは放置され、またあるものは破壊された。文化遺産の保護は、建築史や美学史などの観点から、専門家によって細々と行われたにすぎなかった。

ところが第二次大戦前夜に、プロレタリアート国際主義が瞬く間に形骸化すると、教会建築はロシア民族の文化遺産として再評価され始めた。帰属意識がロシア以外の民族に向けられた場合は、ブルジョワ民族主義として糾弾され続けた一方で、ロシア民族を中心としたソ連という祖国に向けられる帰属意識は、愛国主義として称揚されたのである[(1)]。ポスト・スターリン期以降のロシア・ナショナリズムは一方の極で、ロシア民族の復権を訴え、反体制

1　ロシア語の「愛国主義（патриотизм）」と「民族主義（национализм）」には厳然たる区別が存在している。端的にいえば、前者は市民としての徳性のひとつであり、肯定的な含意があるのに対し、後者は排外的で偏狭な自民族至上主義と定義されている。英語あるいはその訳語で「ロシア・ナショナリスト」と称される活動家は、「ナショナリスト」ではなく「愛国主義者」を自認することがほとんどである。

運動を支える理念でありながら、もう一方で、ソ連愛国主義の延長線上でロシア民族の再評価を訴えるというヤヌスの顔を持つ思想となった。教会建築もまた、ソ連愛国主義を涵養する史跡・文化財として積極的に利用された。宗教的な意義と価値を失った教会建築は、マス・ツーリズムの向かう博物館・自然公園として整備され、祖国の歴史や文化に関して大衆を啓蒙するという社会主義の目的に利するものとされたのである。

本論では、ソ連史・ソ連文化における史跡・文化財保護運動の位置づけを**1920年代から70年代までという長期的スパンで分析の俎上に載せる。このことによって、教会建築に対**する評価の見直しを可能にした後期社会主義時代の社会と文化について、より広範な考察を加えることを目指す。本論が分析の主要な対象とするのは、史跡・文化財保護運動に関わり、その活動に参与した様々な立場の人々の言説である。資料としては、当時の新聞・雑誌記事、論文、党・国家機関に宛てた投書や報告書、集会や会議の議事録、自伝、回想を用いた。

まず第**1節では、十月革命から大祖国戦争開戦以前のロシア共和国における、文化遺産と**しての教会・修道院の保護と利用の状況を確認する。革命以前の文化財を保存しようとした人々は、古きを破壊し新しきを待ち望む社会においては異端的存在であったが、彼らの活動は、戦後の史跡・文化財保護運動に重要な役割を果たすものであった。ここでは、後に「情熱家（энтузиаст）」と呼ばれることになる個人の活動に的を絞って、1920–30年代の史跡保護のあり方を考える。さらに、教会建築や宗教文化財を展示という形で保護することが可能だった聖堂（修道院）博物館について考察する。これらの事例から、愛国主義政策が前景化する以前の文化遺産および教会財産保護の展開と、それを担った主体について検討したい。

以上のような歴史的背景を踏まえた上で、愛国主義のファクターを検討する。第**2節では、**1930年代末以降のナショナル・ボリシェヴィズムの台頭が、愛国主義の高揚を目的として歴史的な文化遺産の再評価を可能にしたことを確認する。フルシチョフ時代には個人崇拝が否定され、レーニン主義への回帰と反宗教運動の強化が呼びかけられたが、史跡・文化財の保護が完全に否定されたわけではなかった。むしろこの時代には戦前からの専門家に注目が集まり、彼らの活動を支持する知識人が文化遺産の組織的な保護を訴えて、党・国家機関に働きかけていったのである。**1960年代の前半には、この呼びかけはさまざまな知識人や学**生を動かすものとなった。フルシチョフ時代における史跡・文化財保護運動の拡大と、それを可能にした遺産保護をめぐるコンテクストの変化について確認する。

第**3節では、1964年10月のフルシチョフ失脚以降、党・国家官僚が積極的に史跡・文**化財保護問題に介入し、全露史跡・文化財保護協会（Всероссийское добровольное общество охраны памятников истории и культуры, 以下「VOOPIK」と略）がその推進母体となっていった過程を追う。**VOOPIKが目的としたのは、史跡・文化財の保護を通した労働者の**共産主義的教育とソ連愛国主義の涵養であった。**VOOPIKの活動家たちは言説の上で共産**主義への貢献を謳うことによって、実際にはより多様な活動を展開したのである。本稿ではその例として、史跡・文化財の博物館・自然公園化とマス・ツーリズムの積極的展開を取り上げる。ツーリズムの拡大は、国内的には健全な娯楽の提供、大衆の啓蒙、愛国主義の増強という目的を持ち、対外的にもソ連イメージの改善並びに外貨獲得という点で、極めて重要な問題であった。ところが実際に観光地として人気を集めたのは、教会建築や革命以前の歴史と結び付いた古都であった。これらの空間はロシア正教や帝政期の歴史を想起させるもの

であったにもかかわらず、マルクス・レーニン主義的理念に適うものとして公然と保護され、多くの人々の目を楽しませたのである。

これまでの先行研究は、史跡・文化財保護運動を博物館学・建築学・美術史学といった個別の専門分野から捉えるか、ロシア・ナショナリズムの表れとみなすかのいずれかにほぼ二分される。後者の研究では特に、ソ連愛国主義が公式イデオロギーとして定着した後期社会主義時代、すなわちポスト・スターリン期からペレストロイカ以前の時代が重点的に分析されてきた。こうした研究では、後期社会主義時代の史跡・文化財保護が、ナショナリズムの台頭であったことと、その体制内への浸透によって担われていた官製の社会運動であったことが強調される。しかし、この運動がナショナリズムに収斂されない幅広い立場の人々を傘下に糾合したことによって、社会的に支えられ展開した点は看過されてきた。

ナショナリズム研究の立場から、史跡・文化財保護運動に最初に注目したのは、1983 年に出版された J. ダンロップの研究『現代ロシア・ナショナリズムの諸相』である。ダンロップは、戦後ソ連におけるロシア・ナショナリズムの思想形成には、抑圧的な体制に抵抗する「異論派（диссидент）」だけでなく、作家、知識人、ロシア正教会の信者や司祭、官僚など多岐にわたる人々が参加したこと、そしてその結果として、社会・文化政策にナショナリズムが大きく根を張っていたことを明らかにした [(2)]。ロシア・ナショナリズムが知識人たちの自発的運動によって生じてきたプロセスを重視したダンロップは、VOOPIK を重要な分析対象のひとつとして取り上げた。VOOPIK がロシア共和国文化省の肝煎りで組織された官製の「社会団体」であったことを認めつつ、ダンロップは刊行出版物のみならず、サミズダート資料を綿密に読み込むことによって、これが「下から」のイニシアチヴによって結成された組織であることを明らかにした。VOOPIK で活動した知識人たちの訴えや組織としての主要な活動は、この研究で網羅的に明らかにされている。しかし、ダンロップは知識人たちの「下から」の動きと、これを懐柔・利用しようとする「上から」の統制が二項対立的に存在したことを前提とする傾向があり、政府内部で発言力を有する知識人を内包していた VOOPIK の複合的な体質を十分に把握しきれていない。

これに対して、マルクス・レーニン主義の「信者」とそれに対抗するロシア・ナショナリストという二項対立の構図を否定し、体制擁護的なロシア・ナショナリストの存在を指摘したのが Y. ブルドヌィである [(3)]。当時の文芸誌と文学作品に加え、ソ連崩壊後に公開されたアーカイヴ資料に基づいてナショナリストたちの動向を分析したブルドヌィは、当時のソ連公式文壇において一世を風靡した「農村派」と呼ばれる一連の作家たちが、文学にとどまらず農業政策や環境保全、文化財保護などの政治的問題にも影響力を及ぼしたことに注意を向けた。1960–70 年代の党・国家の内部では、こうした動きを歓迎し西側の影響を排除しようと努める保守派勢力と、民族的偏重を批判しマルクス・レーニン主義的理念を重視した漸次の改革を目指す勢力が対立していた。そのような状況の中で、M. スースロフのような党中

2 John B. Dunlop, *The Faces of Contemporary Russian Nationalism* (Princeton: Princeton University Press, 1983).

3 Yitzhak M. Brudny, *Reinventing Russia: Russian Nationalism and the Soviet State, 1953–1991* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1998).

央委員会政治局の中心的人物たちが、時々の情勢に応じた勢力均衡を図っていたとするのがブルドヌィの主張である。ブルドヌィはロシア・ナショナリズムをひとまとまりの勢力としてではなく、「リベラル」「保守主義（ネオ・スラブ主義）」「ラディカル（ネオ・スターリニズム）」の3つの型にわけ、彼らが正統的マルクス・レーニン主義の論客よりも、むしろ異なるナショナリズムの潮流と議論を戦わせたことを指摘する。彼の見方を図式化して捉えれば、VOOPIKとは体制内的ナショナリズムの進展に伴って組織されたが、ナショナリズムの行き過ぎを抑制しようとする官僚と、ロシア的文化遺産の保護をより急進的に求める知識人たちが、絶え間ない抗争を繰り広げた舞台のひとつであったということになる。

これらのナショナリズム研究の成果を踏まえ、N. ミトローヒンは体制内的ナショナリストの存在を最重視した。彼によれば、保守的ナショナリストは、政治局員A. シェレーピン（1918–1994）やコムソモール書記長C. パーブロフ（1929–1995）など、体制の中心で影響力をふるった人間を中核として派閥を形成し、次第に社会の広い層に浸透していった[(4)]。ミトローヒンが注目するのは、排外的かつ自民族中心的な傾向をもった、ロシア語の原義そのままのナショナリズムであり、VOOPIKもまたそうしたナショナリストたちの拠点の一つとして分析されている。1980年のクリコヴォの戦勝600周年記念や、1988年のルーシ受洗千年祭では、ロシア史における正教の役割を強調するラディカルなナショナリストの影響が一層強まり、ペレストロイカ以降の彼らは、「パーミャチ」やV. ジリノフスキー率いる「ソ連自由民主党」といった排外的・反ユダヤ的傾向の強い勢力に成長したことが指摘される。

一連のナショナリズム研究では、後期社会主義時代にロシア・ナショナリズムが公的な場面に頻出するようになった理由として、スターリン批判後の「アイデンティティ危機」、すなわち旧来のイデオロギーであったスターリニズムの揺らぎや、ソ連邦内の他の民族に対するロシア民族の劣等意識がしばしば指摘される[(5)]。上述の先行研究もロシア・ナショナリズムの背景をそのように捉え、体制内で生じたソ連愛国主義が、排外的・攻撃的・独善的なナショナリズムへと発展していく中間段階に史跡・文化財保護運動を位置づけるという点で、概ね一致しているように見受けられる。しかし、本文中で論じるように、この運動を根底で支えていた少なからぬ人々は、趣味や愛好の対象として歴史的遺産を眺めていたのであり、従来のロシア・ナショナリズム研究では、彼らの存在が捨象されてしまっているのである。

後期社会主義時代のロシアにおけるフォークロア研究の著しい発展を観察した坂内徳明は、「最近［1960–80年代］に至るロシア民俗・民衆文化研究の展開を支えるものとして、伝統的な民俗文化、あるいは『ロシア的なもの』『ナショナルなもの』『フォークロア的なもの』に対する強固な関心の顕在化」があったとしつつ、「これが欧米研究者がしばしば指摘する『伝統への回帰』と明確に異なることは強調しておく必要がある」と主張している[(6)]。この指摘

4　*Митрохин Н.* Русская партия: движение русских националистов в СССР 1953–1985 годы. М.: Неприкосновенный запас, 2003.

5　ロシア人の劣等意識については以下も参照。塩川伸明『多民族国家ソ連の興亡II　国家の構築と解体』岩波書店、2007年、200–202頁。

6　坂内徳明「現代ソ連におけるロシア・フォークロア学の動向とその問題点」『一橋大学研究年報　社会学研究』第23号、1985年、130頁。なお、1960年代後半以降の、フォークロア研究の動向については以下。坂内徳明「ソ連民俗学の現在」『民族学研究』42巻2号、1978年、356–368頁。

は、民族の過去に対する関心は、アイデンティティ危機や民族的劣等感、単なる懐古主義によるばかりではないということ、現在の研究者たちが置かれた社会状況や環境からみて「新鮮」に映った対象が観察者の興味を惹きつけたことを意味する。さらに、こうした観察者のひとりであり、かつ農村派作家でもあったF. アブラーモフが老婆の語りを通して描く女子学生の関心は、「今ここにある存在」に向けられたものとして描写されている。

> 「(…) なんでおらたちの村がそんなに気に入っただね―三年も続けてきてなさるがなとな。そしたら笑って言うだよ、『本当の水があるからよ、おばあさん』だと…」(…)
> 「よく気のつく、話の好きな娘たちでな。一日中おらのあとをくっついて歩いてな、おらが何喋っても、それを帳面に書くだ。おら訊いただよ、どうしただや、そりゃ何のためなんだね、って。一日も学校へ行ったことのねえラチもねえ婆さんの話のどこが面白えんだね？話ば書きつけるんなら、あんたがたの話で、おらのなんかでねえべ、あんたがたは大学なんちゅう所へ行って、学問ばしてなさるだもの、ってな。そしたら笑って、そんでおらにキスばして、もっともっと話して、おばあさん、だと。何ばもっとだと訊くとな、『大学と学問とかについてもっと話して』だと。」(7)

女子学生たちが村に入るのは、「本当の水」があるからで、老婆に「くっついて」歩く理由は、笑いとキスの中で言語化されない。さまざまに立場を異にするナショナリストの集合体としてVOOPIKを捉えるロシア・ナショナリズムの立場からの史跡・文化財保護運動の研究は、こうした後期社会主義社会の特性を十分に考慮してきたとは言い難い。

後期社会主義時代のソヴィエト・ロシアでは、公認ではないが非合法でもない大衆娯楽文化が、私的なコミュニケーション手段によってのみならず、テレビ、ラジオ、映画、劇場といった公的メディアを通じても開花した。VOOPIKもまた、考古学やロシアの古美術、古代建築に興味を持ち、古都への旅行を楽しみ、一方でそれらが廃墟となって朽ちるのを阻止しなければならないという危機感に動かされた人々の集う、公的な場であったという側面を持っている。史跡・文化財への関心は、ソ連愛国主義の台頭と同時代的に社会に拡大し、さらに歴史への関心や民衆文化への興味という点で愛国主義と重なっていたため、史跡・文化財保護運動が内包していた個人的な嗜好・関心、娯楽や消費主義の側面は等閑視されてきた。本論は、この側面について検討するものである。さらに、そのような関心が向かった、宗教文化財に対するまなざしについても考察を加える。

## 1. 十月革命から文化革命期までの教会建造物保護の試み

### (1) 革命後の修復作業の組織化とその崩壊：P. バラノフスキーの仕事を中心に

革命から内戦に至る時期のソヴィエト・ロシアでは、混乱の中で芸術品や文化財の破壊・盗難・国外流出が危惧され、これを防ぐ方策のひとつとして、財の国有化や博物館設立が図

7 *Абрамов Ф.* Алька // Собрание сочинений: в шести томах / Федор Абрамов; редкол *Лихачев Д.С. и др.* Т. 3. Л.: «Художественная литература» Ленинградское отделение, 1991. С. 114.（邦訳 F. アブラーモフ著（宮澤俊一訳）『木馬 ペラゲーヤ アーリカ』群像社、1989年、221–222頁）原典の初出は1971年。

られた[8]。第二次大戦以前の文化財保護政策については、戦後のロシア共和国でこの問題に対する社会的関心が高まったことに加え、イデオロギー上の要請もあって、ソ連崩壊までにまとまった量の研究がなされた[9]。これらの研究がもっぱら強調するのは、革命以前の文化を一掃して新しいプロレタリア文化を創造することを企図したプロレトクリトや未来派が、歴史的建造物や芸術品を容赦なく破壊した一方で、教育人民委員の A. ルナチャルスキーや V. レーニンが、革命以前の文化からブルジョワ的・民族主義的要素を排し、有用な要素を取り込むことによって、「国際主義的文化」の建設を目指した点である。

しかし、こうした見方はかなり図式化されたものであって、新たな時代の文化をいかに建設するかという議論を巡っては、実際のところ様々な立場があった。さらに、新しい文化を担うべき労農階級出身の知識人が育つまでの間は、旧世代のインテリゲンツィヤの特殊な技術や専門知識、美的感覚が無視できない影響力を持っていた。1920 年代のソ連は専門家不足に悩まされ、党の指導層に取り扱う余裕がなかったり、あるいは引き受ける組織がない問題に関しては、多様な価値観を備えた知識人階級の協力が求められた[10]。革命以前の文化遺産の社会的・文化的意義についても、党・政府機関に何らかの積極的合意があったとは考えがたい。その公式の呼称を取り上げてみれば、1960 年代半ば以降のソ連社会で「史跡・文化財（памятник истории и культуры）」、すなわち共同体の歴史と文化を記憶するものと位置づけられることになる文化的・芸術的・歴史的価値を備えた財は、この当時は「芸術品・古物（памятник искусства и старины）」、すなわち芸術と過ぎ去った時代の記念としての評価を与えられていたに過ぎなかった。

国家規模での文化遺産保護に先鞭をつけたのは、画家で美術史研究家の I. グラバーリ（1871–1960）であった。グラバーリはルナチャルスキーと懇意な間柄で、1913 年から 1925 年にかけてトレチャコフ美術館の館長を務めるなど、革命以降もソヴィエト・ロシアの絵画芸術界に影響力を持っていた人物である。1918 年 5 月に中央機関として「教育人民委員部付博物館、芸術品・古物保護問題局（Коллегия по делам музеев и охране памятников искусства и старины、以下「博物館問題局」と略）」が設置されると、グラバーリは保護の対象を選別する任務にあたった[11]。同年 7 月にはその下部組織として古美術の保存・調

8 *Кузина Г.А.* Государственная политика в области музейного дела в 1917–1941 гг. // Музеи и власть. Ч. 1: Государственная политика в области музейного дела в XVIII–XX в. / Отв. ред. *Каспаринская С.А.* M., 1991. C. 99.

9 ソ連時代の研究状況については、以下を参考にした。*Жуков Ю.Н.* Становление и деятельность советских органов охраны памятников истории и культуры. 1917–1920 гг. M.: Наука, 1989. C. 7–16; *Кузина.* Государственная политика. C. 96–98. 戦後ソ連社会での文化財保護史研究は、ナショナリスティックな傾向に流れやすかった当時の史跡・文化財保護運動を、「レーニンの遺志を継ぐもの」というコンテクストに位置づける目的で進められた。そのため、戦前のソヴィエト・ロシアでの文化財保護の展開の積極的側面や、レーニンとルナチャルスキーのイニシアチブが強調される傾向が強い。1920–30 年代の文化財保護のための組織や一連の法律などが実際に果たしていた役割については、さらなる分析が必要である。

10 Sheila Fitzpatrick, *The Cultural Front: Power and Culture in Revolutionary Russia* (Ithaca: Cornell University Press, 1992), pp. 91–95.

11 *Жуков.* Становление и деятельность. C. 107. それまでは、ペトログラードとモスクワでそれぞれ複数の機関が存在し、文化財と博物館化の問題を巡って対立していた。なお、1918–27 年まで博物館問題局の局長を務めたのは、L. トロツキーの妻、N. トロツカヤであった。

査にあたる委員会[12]が設置され、絵画修復の専門家が多数参加した。組織は改組を繰り返し、1924年には「中央国立修復工房（Центральные государственные реставрационные мастерские）」が組織された[13]。ただし、これらの組織を指導したグラバーリの回想によれば、修復工房は審議会としての役割を果たしていたにすぎず、文化遺産を修復・保存するか解体・売却するかの決定権を握っていたのは教育人民委員部であった。こうした事情にもかかわらず、実質的な作業に携わった人々の多くが、この仕事に献身的に打ち込む「真の情熱家たち（подлинные энтузиасты）」であったと回想される[14]。彼らの多くは雑階級出身の知識人で、革命への態度は多様であった[15]。

そのうちの一人、修復建築家P. バラノフスキー（1892 - 1984）は、教会建築・木造建築の測量調査と修復を専門とした。スモレンスク県東部のシューイスコエ村に農家の息子として生を受けたバラノフスキーは、少年時代に目にした木造教会の美しさに魅かれて、建築の道に進んだ。1912年にモスクワ建築技術専門学校で高等教育を終えた後、モスクワ考古学研究所芸術史部門で学業を続ける傍ら、第一次世界大戦の西部戦線に建築技師として従軍し、革命を迎えた[16]。中央国立修復工房に所属したバラノフスキーは、ロシアの伝統建築とその歴史に関する豊富な知識と技量を現場での修復作業に生かしたが、文化財保護のための根本的な提言を行うことは不可能であった[17]。しかし、バラノフスキーもまた、「情熱家」として献身的に修復作業に取り組んだ。1947年に書かれた自筆略歴には、次のように回想されている。

> ひっきりなしに起こる緊迫した状況は、一刻も猶予のならない、遅延を許さぬ事態だったので、どんどん前に進むしか道はなく、終わってしまったことにこだわることなどできなかった。複製

12 Комиссия по сохранению и раскрытию памятников древней живописи. 実質的にイコンを調査・保護する委員会であったこの組織は、当時の総主教チーホンが正教会のためにも有益なことだとみなして、認可していた *Кызласова И.Л.* Александр Иванович Анисимов (1877–1937). М.: Изд-во Моск. гос. горного ун-та, 2000. С. 5–6.

13 *Вздорнов Г.И.* Александр Иванович Анисимов (1877–1932) // Советское искусствознание ’82. № 2 (17). М.: Советский художник, 1984. С. 302.

14 *Грабарь И.Э.* Моя жизнь. Автомонография // Игорь Грабарь. Моя жизнь. Этюды о художниках / Сост. *Володарского. В.М.* М.: Республика, 2001. С. 265–266.

15 ペトログラードやモスクワでこうした事業に携わっていた人々に関しては、以下を参照した。*Грабарь.* Моя жизнь. Автомонография. С. 262–271; *Кузина.* Государственная политика. С. 93–105; *Кызласова.* Александр Иванович Анисимов (1877–1937). С. 57–80.

16 *Бычков Ю.А.* Жизнь Петра Барановского // Петр Барановский: Труды, воспоминания современников / Сост. *Бычков Ю.А.* и др. М., Фонд П.Д. Барановского, МГО ВООПИиК, 1996. С. 147–149. [http://russist.ru/baranovsky/pb/]. 以下、URLは特記以外2013年1月8日現在有効。

17 バラノフスキーのみならず、多くの専門家が政治的理由から、活動範囲を制限された。例えば、宗教絵画の分野では、グラバーリよりもA. アニーシモフ（1877–1937）のほうが、イコン修復技術や歴史、技法についての造形が深く、強い影響力を持っていたが、ボリシェヴィキ政権に懐疑的で1919年以降再三逮捕されていた後者は、指導的立場に立てなかった。*Рославский М.И.* Деятельность Комиссии по сохранению и раскрытию памятников древнерусской живописи: Центральных Государственных Реставрационных Мастерских. 1918–1934 гг.: дисс. … канд. ист. наук. М., 2002. С. 20–21.

でない原物の史跡が残るか滅びるかという運命は、組織的な修復事業にかかっていたのである。（…）現在に至るまで私は学術的称号や学位を持っていない。かつては我々のような学術的専門家にとって、そうしたものは特に必要だとも義務だともみなされていなかったし、命ある文化遺産を心配するあまり、そうした方向で自分の昇進を図ろうといったことを考えるのは不可能だった（…）。[18]

1910 年代から 1950 年代までにバラノフスキーが関わった修復・調査の現場は、スモレンスク、モスクワ、トヴェーリ、ノヴゴロド、ヤロスラヴリ、ウラジーミル、ニジニ・ノヴゴロド（後にゴーリキー）、カルーガの諸県（後に諸州）、北ドヴィナ川流域圏（アルハンゲリスク、ヴォログダ、カレリア）、ウクライナ、ベラルーシ、ザカフカース（アゼルバイジャン、グルジア、アルメニア）、黒海沿岸部など、極めて広範囲にわたる[19]。このリストには彼が指揮を執ったものもあれば、他の建築家の指導・監督下で作業をしたものも含まれる。中央国立修復工房に上級研究員・建築家として勤務していたバラノフスキーは、修復工房の審議会が策定した計画に従って[20]、文化財の修復・調査を行っていた。また、各地で始まった都市の建設や再開発に伴って、古い建造物の処理が問題となったが、取り壊されようとしている対象の歴史的・芸術的価値を鑑定するのも、修復工房の専門家たちの仕事であった。

こうした仕事の傍らバラノフスキーは、アレクセイ・ミハイロヴィチ帝（在位 1645–1676）の夏の宮殿の跡地であるモスクワ郊外のコローメンスコエ村に、ロシア建築博物館を創設することを教育人民委員部に訴え、これが承認されると 1922 年から 1933 年まで初代館長を務めた。設立当初の博物館の職員は館長以下、事務長と警備員を合わせて 3 名、1926 年の蔵書は 12 冊で、バラノフスキーが地方で収集した中世ロシア芸術が主要なコレクションとなった[21]。

ところが、芸術品・古物という名のもと教会建造物やイコンを保護する修復工房の専門家たちの熱意は、新しい社会とそれに見合った文化を創り出すという時代の潮流に逆行するうえ、戦闘的無神論者同盟（Союз воинствующих безбожников, 1925–1947）の影響力が強まっていく社会においては理解されなかった。修復工房に対する風当たりは、1920 年代末から始まったいわゆる「文化革命」の進展と共に強まっていく。1929 年 9 月にルナチャルスキーが教育人民委員を更迭されると、グラバーリも 1930 年には「日を追うごとに複雑で困難になっていく行政管理業務と、個人的な創作活動のいずれかを選ばなければならなくなった」として指導的立場を退いた[22]。

---

18 *Барановский П.Д.* Автобиография // Петр Барановский. С. 7–14.

19 Перечень научных исследований, экспедиций, археологических раскопок, обмеров, фиксаций и проектов реставрации памятников архитектуры, научных докладов и печатных работ с 1911 г. до 1964 г. // Петр Барановский. С. 111–145.

20 審議会の役割について以下を参照。*Грабарь.* Моя жизнь. Автомонография. С. 267.

21 バラノフスキーのコローメンスコエにおける仕事について、以下を参照。*Ильина М.Н.* Первый директор // Петр Барановский. С. 209–218. 現在のコローメンスコエ自然公園は、モスクワで有数の郊外保養地の一つであり、世界遺産にも登録されている。

22 *Грабарь.* Моя жизнь. Автомонография. С. 271.

1931 年 4 月に行われた中央国立修復工房の機構粛清委員会の会議で、バラノフスキーは建築資材の着服を疑われた上、史跡保護に際しての政治性の欠如、教会建築修復に際しての無批判的態度、社会活動への無貢献を非難された[23]。この会議と前後して、いくつかの新聞紙上で、修復工房に対する痛烈な批判が行われた。3 月には『無神論者（Безбожник）』紙上で、グラバーリの後を襲って修復工房長官となった L. レシチンスカヤが、修復建築家たちの行為は文化遺産を守るものではなく、個人的利益のために行われているものであることを「暴露」した[24]。O. マンデリシタームや V. パステルナークに対する攻撃でも有名な批評家 D. ザスラフスキーは、彼らの訴える学術的・芸術的価値が仮面にすぎず、本当の目的は教会と聖職者の幇助であると悪辣な皮肉を込めて糾弾した。

> ［修復工房の専門家たちの］ソヴィエト的忠誠心は仮面にすぎない。彼らはソ連政権が間もなく崩壊すると信じており（…）今のところは自分たちの立場を利用しようと目論んでいる。（…）彼らは学問を教会へ、芸術をへぼ聖像画へと変更させ、そしてすべてを異様な教会商業施設へと変えてしまったのだ。[25]

バラノフスキーが「破滅の年」と回想する 1933 年には、彼のみならず、同僚の建築家、芸術家たちの多くが逮捕・流刑された[26]。翌 1934 年に中央国立修復工房も閉鎖され、彼らの事業は頓挫したかに見えた。

### （2）聖堂博物館と「情熱家（エントゥジアスト）」：宗教と文化を分けるまなざし

1918 年 1 月に発令されたロシア人民委員会議法令「教会の国家からの、学校の教会からの分離について」によって、教会財産は人民のものであることが宣言された。教育人民委員部付博物館問題局は 1920 年に指令[27]を出し、文化財としての価値を有する教会財産を国有化する際の指針とした。これに基づいて、教会文化財は「極めて例外的な歴史的・芸術的価値を持つ財」、博物館展示に適する「高い歴史的・芸術的価値を持つ財」、文化的に重要な価値のない「教会生活のための常用品」の 3 つに分類され、第一のカテゴリーに属するものおよび、特別な事情がある場合には第二のカテゴリーに属する物品も、教会から没収され、博物館問題局の保護下で展示に供されることとなった。また 1922 年 2 月には、前年沿ヴォルガ地域で発生した飢饉をきっかけとして、教会財産の供出を命じる決定が全露中央執行委

23 *Бычков.* Жизнь Петра Барановского // Петр Барановский. С. 157.

24 См. *Бычков.* Жизнь Петра Барановского // Петр Барановский. С. 157; *Лецинская Л., Козырев.* Реставрация памятников искусства или реставрация старого строя // Безбожник. 1931. № 16.

25 *Заславский Д.* Преподобные отцы-художники // За коммунистическое просвещение. 1931. № 81. С. 4.

26 この逮捕については、1964 年にバラノフスキー自身が KGB に宛てて書いた手紙の下書きに詳しい。*Бычков.* Жизнь Петра Барановского // Петр Барановский. С. 158–162.

27 Инструкция по учету, хранению и передаче религиозного имущества, имеющего историческое, художественное и археологическое значение. М.: Отдел по делам музеев и охране памятников, 1920. 著者未見。この指令とその内容については、次を参照。*Каулен М.Е.* Музеи-храмы и музеи-монастыри России: каталог-справочник. М.: ПИПОЛ Классик, 2005. С. 25.

員会によってなされ、暴力と破壊を伴う収奪が各地で展開された[28]。しかしその一方で同月、教育人民委員部組織である学術総局（Главнаука）は、文化的な価値のあるイコノスタスや燭台などを聖堂から持ち出して教会の内装を破壊することや、イコンから宝玉や金糸・銀糸を抜き取ることを禁じる指令を出していた[29]。文化財としての宗教芸術の保護を訴えた指令は、教会財産没収キャンペーンにおいて、実効力を持つことはなかったが、政府内部にそのような立場が存在したことを示すものである。

教会建築やその内部の装飾物などの宗教芸術を保存するための唯一の方法は、博物館化であった。教会が相次いで閉鎖される中、その財産の一部は反宗教プロパガンダの目的で聖堂内に展示された。革命直後のロシア共和国では空前の博物館建設ブームが起き、1918–20年の間に246館の博物館が新たに開設され、そのうち186館は地方に組織されたものであった[30]。これらの現場で活躍した人々の多くが、自ら進んで博物館創設のイニシアチヴを取り、これを運営する責任を負った「情熱家」と呼ばれる知識人たちだった。このことの一例を、同時期のソロフキ特殊目的収容所（SLON）付属の聖堂博物館に見ることができる。かつて北ロシアで最も豊かな修道院であったソロフキには、大量の文化財が残されていた。宗教的要素を含んだ文化財は、それが崇拝ではなく、学術的研究の対象であることが強調された。付属博物館は「あちこちに散逸し、急速に消えゆこうとしている過ぎし昔の記憶となるものを、学術研究のために収集し保存すること」を目的としたのである[31]。ソロフキ修道院が有していたアンドレエフスカヤ教会について調査・研究したN. ヴィノグラードフは、その報告書の中で、社会主義への理想に邁進する社会における「過ぎし昔の記憶」について次のような説明を試みている。

> 民衆が輝かしく、喜びに満ちた新しい未来を目指して進んでゆくのは当然である。重苦しく屈辱的な思い出と結びついた古いものすべて、憎むべきものすべてを民衆が排除しようとすることは当然である。
> しかし、古いサラファン［農村女性の日常的衣装］にも、古い教会にも、色あせた刺繍や太古のイコンにも、いかなる罪もないのである。
> これらのために民衆が悪い暮らしをしていたのではないのだから。[32]

28 Декрет Всероссийского Центрального Исполнительного Комитета о порядке изъятия церковных ценностей, находящихся в пользовании групп верующих // Русская Православная Церковь в советское время (1917–1991) / сост. *Штриккер Г.* М., 1995. С. 148.

29 Инструкция для представителей отдела музеев Главнауки и его органов на местах, действующих на основании декрета о ликвидации церковного имущества от 2 января 1922. 著者未見。この指令とその内容については、次を参照。*Постернак О.И.* Музейная политика России и судьба религиозного культурного наследия в 1920–1930-хх гг.: Дис. … канд. ист. наук. М., 2006. С. 81–82.

30 Музейное дело России. 3-е изд., и доп. / Под ред. *Каулен М.Е., Коссовой И.М., Сундиевой А.А.* М.: ВК, 2010. С. 134.

31 *Серебряков А.* Исторический очерк краеведческой работы на Соловках: Материалы Соловецкого отделения Архангельского Общества краеведения. Вып. 1. Соловки, 1926. С. 6.

32 *Виноградов Н.* Обозрение христианских древностей. Отдел II. Заповедник Б. Заяцкого острова: Материалы СОК. Вып. 13. Соловки, 1927. С. 7–8.

「情熱家」たちが宗教的崇拝と学術的関心の分離を強調したにもかかわらず、聖堂博物館の展示は長続きしなかった。反宗教的雰囲気が濃厚となった1920年代の末には、聖堂博物館は繰り返し攻撃の対象となり、1928年のモスクワ労働組合文化部では「聖堂・修道院博物館が大半の場合、宗教的感情の一種の温床となっている」ことが指摘された[33]。また1929年の『プラウダ』紙上では、スモレンスク州のボルヂン修道院で、修道士がコルホーズ建設を妨害しており、同修道院博物館の館員らが、修道士に博物館付属の土地を貸与することで、彼らの行為を支援しているとの批判が展開された[34]。

さらに同時期には、革命政権の下で教育を受けた「新しい」知識人が登場し始め、「古い」知識人によって支えられていた博物館のシステムの変革を始める。1930年7月には、ロシア共和国教育人民委員部決議によって、博物館に勤務する古い人員の再教育と、新しい人員の養成、特に若い労働者・農民の抜擢（выдвиженцы）に力を入れることが謳われた[35]。たとえばモスクワ・クレムリンの武器庫では、1922年以来館長を務めていたD. イヴァノーフ（1870–1930）に代わって、1930年、C. モナフチンが後を襲った。前者が「法学者、博物館学者、芸術史家、20以上の学術論文の著者で、フランス語、英語、ドイツ語、イタリア語、ラテン語、ギリシア語に通じている」識者だったのに対し、後者はボーリング機械工場の農業機械組立工であった[36]。

新しく就任した指導者たちは、概して旧世代の知識人が築いたものを否定しがちであった。1925年から1936年までの10年間に、ロシア共和国内で労農階級出身の学芸員が全体に占める割合は16.3%から51.7%に増加したのに対し、高等教育を受けた学芸員の割合は1925年の59.9%から1940年の27.7%にまで低下した[37]。新しい学芸員たちの登場は、展示場所も、資金も展示品も不十分だった質の低い（時には紙の上でしか存在しない）「反宗教博物館」の大量発生とも軌を一にしていた[38]。専門家を抱えた大都市のいくつかの宗教史博物館を除けば、ソ連の地方都市の聖堂博物館は、「古い」知識人たちの言葉を借りれば、「俗悪な」反宗教博物館となって全国に広がった。1920–30年代の博物館のこうした変化を大枠での政治の変化と絡めて捉えた時、地域による多少の差はあれ、これを全ロシア的な状況として指摘することができるだろう。

---

33 *Каулен.* Музеи-храмы и музеи-монастыри России. С. 31.

34 Уничтожим правооппортунистические иллюзии о возможности мирного врастания кулака в социализм // Правда 15. 12. 1929. С. 4.

35 *Демина Л.И.* Журнал «Советский музей» как источник по истории музейного строительства // Музееведение: Из истории охраны и использования культурного наследия РСФСР. М., 1987. С. 186.

36 *Юренева Т.Ю.* Музееведение: Учебник для высшей школы. М.: Академический Проект, 2007. С. 301–302.

37 *Юренева.* Музееведение. С. 304.

38 *Тарасова И.В., Ченская Г.А.* Из истории музейного дела в России // Труды государственного музея истории религии. Вып. 2. СПб., 2002. С. 25.

### (3) 小括

以上みたように、革命後の文化遺産の保護と啓蒙目的での利用は、「古い」知識人からなる「情熱家」たちを中心に担われていた。このシステムは、**1920 年代末から始まった文化革命**とそれに伴うカードルの交代によっていったん崩壊する。修復事業は事実上停止し、古い建造物の利用は党の政策に従って行われ、展示物に対する学術的アプローチよりもイデオロギー的なそれが優先した。

「情熱家」たちが、保護すべき対象としての文化財と「ロシア民族」の歴史・文化をどの程度まで結び付けていたのかという問題は、今となっては明確な答えを得ることは困難である。ただし、崇拝の対象としてではなく学術的分析の対象として教会建造物や絵画を捉える立場は、無神論と対立するものでは決してなく、むしろ宗教を相対化する世俗的視点の延長にあったことが指摘されよう。その一方で、**1920–30 年代半ばまでの社会状況下では、宗教的要素を多分に含んだ文化遺産をソ連愛国主義と結びつけて語る言説的枠組みは存在しなかった**。仮に古い文化財の庇護者たちが、共同体の歴史や文化の重みを宗教的文化財に感じていたとしても、その共同体が「ソ連」であったとは考えにくい。だからといって、これらと「ロシア民族」との結びつきを言明することは避けられていた。「情熱家」たちが守ろうとしたのは、歴史学的・美学的価値を有する文化遺産に他ならなかった。そしてそれは、宗教的崇拝や民族主義的な感情からは独立して、それ自体が純粋に学術的な研究対象であることが強調されたのである。

## 2. 第二次大戦期からフルシチョフ体制までの文化遺産保護運動の展開

### (1) ナショナル・ボリシェヴィズムの展開と過去の遺産

スターリン期のロシア・ナショナリズムを論じた D. ブランデンバーガーは、ソ連の人々の精神的な連帯感を重視しながら検討を加えた。マルクス主義に基づいた「プロレタリアート国際主義」が主に知識人階級によって支えられていたのに対し、歴史的人物や事件に範をとった英雄譚は、広く大衆の想像力を掻き立てる魅力を持っていた。さらにスターリンの大テロルによって、同時代の人物については「昨日の英雄が今日の人民の敵」という状況が頻出するようになると、革命以前の英雄のモチーフは相対的に安全なものとして利用されるようになった[39]。学校教育を通じて歴史と文学の知識が共有されると、1930–40 年代にはロシア・ソ連史を通して初めて、知識人ではなく大衆が担うソヴィエト愛国主義が台頭する。さらに、ナショナル・ボリシェヴィズムにおいて否定の対象は、革命以前の過去ではなく、ナチス・ドイツやユダヤ人などの「外から来たもの」へと移った。すなわち、ナショナル・ボリシェヴィズムは、ポピュリズム、ロシア中心主義、国家主義（エタティズム）を主要な要素としながら、戦争を通じて半ば公認されたイデオロギーとして形成されたのである。

こうした愛国主義的な傾向が強まるにつれ、古いロシアの建築や文化財の修復事業も重要性を増した。1934 年に執筆された画家グラバーリの自伝は、1937 年になって出版され、革

39 David Brandenberger, *National Bolshevism: Stalinist Mass Culture and the Formation of Modern Russian National Identity, 1931–1956* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2002), pp. 60–61.

命直後のソ連社会で修復工房が果たした役割が肯定的に紹介された。多くの古い建造物の修復の必要性が訴えられはじめ[40]流刑地に送られていたバラノフスキーも、1936年5月、刑期半ばで釈放された。グラバーリに加え、当時最も権威のあった建築家A. シューセフ（1873–1949）やI. ジョルトフスキー（1867–1959）の斡旋によって、釈放後のバラノフスキーは、ソ連建築アカデミー顧問に任命され、モスクワ居住権こそ剥奪されていたものの、修復の仕事を再開することができた[41]。

1943年には、バラノフスキーは国家非常委員会から派遣された鑑定団に参加して、キエフ、チェルヌィゴフ、スモレンスク、ポロツク、ヴィテプスクにおける、「ファシストの簒奪者によってもたらされた」史跡の損傷状況の調査に向かった。修復専門家たちは「古い生活、教会とがらくた」の擁護者という階級敵に等しい立場から、ドイツ軍が破壊したロシアの史跡の重要かつ貴重な防衛者へと格上げされたのである。1944年2月、バラノフスキーはソ連建築アカデミー修復部の長官に任命され、モスクワ居住権を回復した[42]。1934年以降閉鎖されていた修復工房も、同年9月の人民教育委員部指令によって、「中央芸術修復工房（Государственная центральная художественно-реставрационная мастерская）」と名称を改めて再開を許可された[43]。

流刑地から戻ったバラノフスキーは、1939–40年にかけて、アゼルバイジャンにおいて集中的な調査研究を行っていたが、この経験も愛国主義の文脈で生かされることとなった。1946–47年にかけての期間、バラノフスキーをリーダーとする建築家の集団が歴史学研究所の依頼を受けて、2度にわたってカフカースに入り、「カフカース、ビザンツ、バルカン諸スラヴ民族と古代ルーシの建築におけるつながり」というテーマで調査を行った。この調査で、バラノフスキーはアゼルバイジャン北部ガフ地区に残るカフカース・アルバニア古代王国の教会建築を取り上げ、そのいくつかの特徴をシリアやイラン、あるいはアルメニアとグルジアに残る教会建築と比較して、イスラーム化以前のアルバニア王国がこれらの地域と極めて近い文化圏にあったことを指摘してみせた[44]。

### （2）学知から民衆文化へ：文化遺産保護のコンテクスト

1956年のスターリン批判を境に、フルシチョフ政権は、スターリン時代の弊害を除き、レーニン主義へ回帰することを訴えた。「雪どけ」と呼ばれる文化的潮流は、スターリン時代には許されなかった言動を可能にしたが、それは混乱も引き起こした。文化遺産保護の是非を

40 Brandenberger, *National Bolshevism*, p. 92.

41 *Бычков.* Жизнь Петра Барановского// Петр Барановский. С. 162. ただし、古美術や建築の修復に関わっていた専門家のすべてが復権したわけではない。たとえば、絵画修復士のアニーシモフは1937年に銃殺されている。

42 *Бычков.* Жизнь Петра Барановского. С. 166.

43 Распоряжение СНК СССР № 17765-р. от 1 сентября 1944 г. [www.souzmuseum.ru/reestr/vserossijskij-hudozhestvennyj-nauchno-restavracionnyj-centr-_308.html] (2011年8月31日現在有効)

44 バラノフスキーの調査結果は「クム村・レキト村における史跡」と題して1947年の『アゼルバイジャン建築：ニザーミーの時代』に掲載された。*Барановский П.Д.* Памятники в селениях Кум и Лекит // Петр Барановский. С. 39–46.

巡ってもまた、ナショナル・ボリシェヴィズムの薫陶を受けた愛国主義者と、マルクス・レーニン主義的立場から先進的工業社会の建設を求める人々の間で激しい論争が展開された。フルシチョフ時代には新しい都市建設と反宗教政策に伴って、古い建造物の破壊、とりわけ教会建造物の閉鎖が、旧ドイツ軍占領地域と新しく併合された領土を中心に容赦なく行われた。たとえば、フルシチョフによる反宗教キャンペーンが開始される以前の1957年の時点で、ソ連邦内に存在していたロシア正教の聖堂は13,430棟であったのに対し、キャンペーンが終了した直後の1965年には、その数は7,551棟にまで減少していた[45]。信者共同体によって用いられなくなった教会は、博物館やクラブなどの文化啓蒙施設、その他の産業施設として転用されるか、取り壊されるのが常であった。この過程で歴史的価値を持つ多くの古い教会も保護のリストから消され、破壊された。ロシア共和国文化省に提出した報告の中で、歴史家のN. ヴォローニンは、ベラルーシとウクライナにおける史跡保護の危機的状況について述べている。

> 1961年9月20日、ベラルーシ文化省はヴィテプスク市執行委員会の報告書に従って、国の保護下に置かれている史跡のリストから、かつての受胎告知教会を削除することを決議した。これは12世紀ロシアの非常に貴重な価値を持つ建築作品で、全連邦レヴェルでの価値を持つ史跡である。1961年12月には、市執行委員会の指示により、史跡のかなりの部分が破壊された。12世紀に建造された壁を破壊して出てきた砂利は、道路の建設に使用された（…）。ウクライナ社会主義連邦共和国の指令部へは、傑出した史跡である12世紀の建築ピャトニツカヤ教会の取り壊しに関するチェルヌィゴフ市執行委員会の提案が持ち込まれた。[46]

こうした急進的な都市開発計画に危機感を覚えた愛国主義的知識人たちのイニシアチヴによって、史跡・文化財さらには祖国の自然と景観の保全を訴える運動が始まったことは、これまでの先行研究でも指摘されてきた[47]。N. ミトローヒンは、1950年代末から60年代初頭にかけて、多くの建造物が暴力的な破壊を受けたものの、比較的自由な時代であったため、社会（общественность）の抗議を代弁する組織を形成することが可能であったとしている。彼の主張によれば、思慮を欠いた破壊活動は「戦前、さらには革命以前の知識人たち、若い知識人たち」を史跡保護のために団結させ、そのリーダーとなったのがバラノフスキーであった[48]。

---

45 *Шкаровский М.В.* Русская православная церковь при Сталине и Хрущеве. М., 2000. С. 398–399.

46 Государственный архив Владимирской области (ГА ВО), ф. 422, оп. 1, д. 903, л. 4.

47 Brudny, *Reinventing Russia*, pp. 45–46. また、J. ダンロップは、サミズダート誌『ヴェーチェ』に掲載された次のような回顧的な記事を引用している。「フルシチョフの破壊キャンペーンに人々は最後の打撃を見た。教会は閉鎖されるにとどまらず、吹き飛ばされていった。（…）ロシアの文化がロシアの大地から消し去られていく（…）」。Dunlop, *The Face of Contemporary Russian Nationalism*, p. 67.

48 *Митрохин.* Русская партия. С. 300.

バラノフスキーら専門家が、フルシチョフ時代の反宗教キャンペーンや都市計画に伴う、古い建造物の取り壊しに強い懸念を抱いたことは間違いないが、それを契機として社会に訴えかけ、政治を動かそうという運動を組織するイニシアチヴを取りえたかどうかは検討すべき問題である。むしろそれまでと異なる価値観を希求しはじめた知識人らの運動がそれ以前からのバラノフスキーの活動と一致したと考える方が適切である。換言すれば、戦前から文化遺産の保護に取り組んできた専門家が依拠した正当化のレトリックと、フルシチョフ期の後半から現れた文化財保護を求める知識人たちが用いたレトリックは微妙に異なっていたのである。

前者の例として、モスクワ・アンドロニコフ修道院史跡における「アンドレイ・ルブリョフ名称中世ロシア芸術美術館」創設・開館を求める運動（1947–1960）を挙げることができる。この修道院は、15 世紀初頭に活躍したイコン画家アンドレイ・ルブリョフの事績と深く結びついている。1947 年 12 月付のソ連閣僚会議によって、ルブリョフ美術館開設は決議されたものの、これを実行に移すべきモスクワ市労働者代表会議など行政諸機関の怠慢と妨害によって、実際の調査研究・収集・展示活動は不可能な状況が続いていた[49]。この状況を打開するべく立ち上がったのは、画家のグラバーリ、芸術史家アルパートフといった革命以前に誕生した知識人であった。彼らは、芸術家同盟モスクワ支部（MOCX）や社会団体であるソ連平和擁護委員会（СКЗМ）のメンバーとして、文化財保護を訴えた。前者は 1954 年にロシアで初めての「中世ロシアの芸術展」を開催し、後者はユネスコに生誕 600 周年となる 1960 年を「ルブリョフ年」として記念することを提言することによって、同年にルブリョフ美術館を正式に開館させることに成功したのである。こうした先駆者たちは、この時点までに社会的地位を築き上げた建築家、歴史家、芸術史家であり、専門的知識を有する人々が大半だった。古い文化財の保護のために、彼らが強調したのはそれぞれの専門的立場からの学術的価値に他ならなかった。

一方で、フルシチョフ末期に現れた、歴史的な文化遺産に対する関心は、専門家集団を越えた広い社会層に共有され、これ以降の史跡保護を訴える言説に反映されることになる。1962 年 3 月には雑誌『モスクワ』に、共産主義建設の文脈で、歴史的相貌や自然環境を生かした都市造りができないかという提言「今後モスクワをいかに建設すべきか？」（以下「モスクワ建設」と略）が、建築家 P. レヴャーキン（1906–1990）、画家 A. コロボフ（1905–1977）、技師 V. トゥイドマン（1894–1972）、作家 N. チェトゥノヴァ（1901–1983）の連名で発表された[50]。彼らは、現在の新しい都市計画が民意を反映せずに秘密主義的に行われていると批判し、このままではモスクワはその「歴史的・民族的特徴」を失って顔のない都市になってしまうと危惧した。建築に対する彼らのまなざしは、「民衆（ナロード）」との関係で次のように規定されていた。

---

49 Центральный архив город Москвы (ЦАГМ), ф. 2971, оп. 1, д. 2, л. 15; *Вачнадзе Н.З.* Д.И. Арсенишвили: Эскизы к творческому портрету. Тбилиси: Издательство Тбилисского университета, 1990. С. 239–240, 246, 259–260.

50 *Коробов А., Ревякин П., Тыдман В., Четунова Н.* Как дальше строить Москву? // Москва. 1962. № 3. С. 147–160.

> 他のいかなる芸術とも違って、建築においては、他ならぬナロードの創造的役割が大きい。ナロードの感情や思想が［建築と］同様に直接に反映されている文学、絵画あるいは彫刻においては、たった一人の職人あるいは芸術家の名が残るのみであるのに対し、建築はナロードが造ったものである。とりわけ中世には、建築構造の構想や、周囲の景観に配慮した立地といった建築計画の全体さえもが、ナロードの手によって生み出された。彼らは美なるものについての自分たちの夢想、この上ないあこがれ、知識、能力、美的感覚を共同での建設に注ぎ込んだのである。(51)

この論文は新しい都市計画に真っ向から反対しているのではない。「モスクワ建設」の主張は、公害や人口過密から解放された、適切な都市環境を整備することを訴えたものであった。ところが、ソ連的建造物を設計してきた建築家らは、「モスクワ建設」の主張を単に古い建築物を守れという訴えに集約した。反対派らはこの記事に対し、『プラウダ』紙上で同年**5月10–11日の2日間にわたって激しい批判を展開した**(52)。彼らは、「モスクワ建設」の賛同者らが、住宅不足に悩む住民の窮状を無視し、工場を増設して設備の近代化や自動化を図り、産業を発展させよという要請に関心を寄せぬまま、無責任な発言をしているとした。記事の筆者たちは、過去の優れた建造物が「ロシアのナロードの民族的才能」の体現であることは認めつつも、「我々は過去のモスクワを、我々がそのために生き働いている、現在や未来のモスクワより良いとは思えない」として、レヴャーキンらの「モスクワ建設」の主張を退けたのである(53)。

革命以前の過去の文化財が、ナショナル・ボリシェヴィズムの影響下で再評価されたのち、共産主義建設という未来志向型の目標を掲げたフルシチョフ時代には、過去の遺産をどう評価するかについては大きく見解が分かれた。しかしレヴャーキンらの主張を否定する立場の人々にも、古い建築や芸術を「ロシア民族の才能」の反映とみる見方が広く共有されていたことは重要である。唯一の指導者たる偉大な英雄像の描写を個人崇拝として退けた後、社会変革を促し支える力として注目されたのは庶民であった。そして史跡・文化財の作り手としての庶民は、「労農階級」などの社会主義的用語ではなく、よりナショナルな響きをもった「民衆（ナロード）」という言葉を用いて表現されたのである。

史跡・文化財を効率的に保護・利用するためには、そのための公的機関を組織することが必要不可欠だということは、これに関心を寄せる人々に痛感されていた。専門家や官僚の間でこの問題が議論されている間に、いち早く組織化を実現したのは若者たちであった。**1947年以降バラノフスキーが取り組んでいた、モスクワ市内に位置するクルチツキー修道**院（Крутицкое подворье）の修復作業に、自発的に参加し始めた学生たちが、「祖国」を意味する「ロージナ（Родина）」というクラブを結成したのである。

参加者らの回想によれば、この組織を結成する契機となったのは、モスクワ科学技術大学

---

51 *Коробов, Ревякин, Тыдман, Четунова.* Как дальше строить Москву? С. 148.

52 Еще раз по поводу излишеств в строительстве и архитектуре (из редакционной почты) // Правда. 10. 05. 1962. С. 2; Против вредной путаницы в вопросах градостроительства (Письмо в редакцию) // Правда. 11. 05. 1962. С. 4.

53 Против вредной путаницы.

の学生たちによる 1964 年春のペレスラヴリ・ザレツキー、ロストフ、ウグリチへの旅行であった [54]。教会建築が数多く残るこれらの古都は学生たちに鮮烈な印象を残し、彼らは帰りのバスの中で旅行にちなんだ写真展を大学で開催することを計画した。5 月 8 日、写真展を訪れ学生たちの夕べの集いに参加したバラノフスキーは、学生たちの求めに応じ、クルチツキーの修復作業への無償奉仕を提案する。この作業への参加の初日に「ロージナ」が結成された。彼らの活動は 1964 年 7 月 4 日に発表された文筆家 V. ペスコフの記事「祖国（Отечество）」によって広く知られるようになった [55]。1965 年 2 月には、モスクワ州文化局とコムソモール州委員会によって「ロージナ」が承認され、レニングラードにもロシア美術館に付属する形で同様のクラブが結成された。

このような若者たちによる自主的な動きに、彼らより上の世代に属する文化人たちもまた呼応した [56]。その顕著な例として、彫刻家 C. コニョーンコフ（1874–1971）、画家 P. コリン（1892–1967）、作家 L. レオーノフ（1899–1994）らが、1965 年の『若き親衛隊』で訴えかけた論文「われわれの神聖な宝を大切に！」を挙げることができる [57]。

この論文で言及されるのは単なる「史跡」ではなく、「往時の民族の偉大さを示す記念碑やわが民族の幾世紀にわたる栄光」で、それを尊ぶことのできる精神性や感性が重視されている。こうした保護を訴える際、かつてのレトリックであった学術的価値は称揚されないどころか、「幾百年を経た高名な墓」、すなわち聖者の不朽体が「いかがわしい学術的研究のために」冒涜的に暴かれたと批判された。史跡・文化財保護運動に非専門家、若い世代の知識人が多数参入していく背景には、学知とそれに裏付けられた学術的探求以上に、感情に訴える文化的精神論・歴史観が大きな役割を果たしたのである。

先に言及した「ロージナ」についても、バラノフスキーが持っていた学術的興味関心に加えて、文化遺産に民族の歴史や栄光を読み取ろうとするナショナリスティックな志向を観察することができる。「ロージナ」に参加した 1930–40 年代生まれの若い世代は、ナショナル・ボリシェヴィズムの雰囲気が濃厚な時代に教育を受け、自己形成を果たした [58]。「ロージナ」に参加した若者たちの中には、ペレストロイカの時代に排外主義的ナショナリスト集団「パーミャチ」を結成することになる D. ヴァシリエフ（1945–2003）なども名を連ね、彼らはその後、史跡・文化財保護運動を通じて、あるいはこれを活動の一部として、ロシア民族中心的な愛国主義を展開していくことになる。ただし、その際注意すべきは、彼らのほとんどが、ソ連の発展をロシア史の延長線上に位置づける歴史観を共有していたことである。この点については、後でもう一度検討したい。

---

54 *Глущенко Н.Д., Дмитриев С.Е.* Им зажженный огонь // Петр Барановский. С. 272–274.

55 *Глущенко, Дмитриев.* Им зажженный огонь より。記事については、引用註がないため未確認。ペスコフは 1930 年生まれのジャーナリスト。コムソモーリスカヤ・プラウダに写真家・記者として勤務。

56 *Митрохин.* Русская партия. С. 311.

57 *Коненков С.Т., Корин П.Д., Леонов Л.М.* Берегите святыню нашу! // Молодая гвардия. 1965. № 5. С. 216–219.

58 ブランデンバーガーは、彼らがナショナル・ボリシェヴィズムの影響を受けていない方が不思議だと指摘している。Brandenberger, *National Bolshevism*, p. 245.

その一方で、この時代の若者たちの心を惹きつけていたのはナショナルな価値観ばかりではない。彼らが憧れていたのは、言い古されたイデオロギー的言説の外の世界、新しい価値観であった。そうして向かった先の一つが、古いロシアの文化、農村におけるナロードの伝統だったことにも注意を払うべきである。同世代の若者との小旅行や意見交換、党やコムソモールの指導によらない自発的活動は、「雪どけ」を経験した人々が可能にしたものである。「ロージナ」に始まる、史跡・文化財保護を訴える社会層は多様であった。**1960 年代半ばに**始まった史跡・文化財保護運動は、ロシア・ナショナリズムだけではなく、戦後の若者たちの個人的な興味関心の追及、娯楽や消費主義への欲求を反映していたのである。

### (3) 文化財保護のための公的組織結成に向けた試み

文化財保護の必要性は、政府によっても認識されていた。ロシア共和国閣僚会議だけをみても、**1947 年以降 3 度にわたって文化財の保存・利用状況を改善するための決議がなされ**ていたことは重要である[59]。フルシチョフによる反宗教キャンペーンが継続していた 1962 年でさえ、ソ連文化省の指令を受けたロシア正教会問題評議会[60]が、教会閉鎖に伴って教会財産や装飾品を許可なく処分することを禁ずる内容の文書を、各共和国・自治共和国、地方、州に送付し注意を喚起している[61]。さらに、**1963 年 1 月 23 日、ソ連邦文化省大臣 E. フー**ルツェヴァの署名入りで、全ソ文化財保護協会の結成の検討を求める提案が、党中央委員会に提出された[62]。しかしながら、政府によるこれらの決議や指令が、文化財保護の状況を実質的に改善したわけではなかったことは、すでにみた投書や「モスクワ建設」などの雑誌論文からもうかがえる。政府文書では、地方の勤労者代表ソヴィエトが、政府の意図とは無関係に、史跡・文化財保護事業に対して許されざる怠慢や違反を犯していることが、しばしば批判されてきた。

それゆえに、文化財の研究・保護に直接携わってきた専門家は、文化財保護を中央集権的に一括して管理できる公的組織の結成が不可欠であることを痛切に感じていた。専門家のみならずこの事業に関心を寄せる文化人たちは、新聞や雑誌への投稿、党や国家機関への投書という形で、史跡・文化財保護組織の統一を訴えた。たとえば、歴史家ヴォローニンは**1960 年代の初期の段階で、ロシア共和国文化省に対し、「保護の問題は厳密に学術的な立場**から対応されるべきであって、行政・官僚的原則に従うものではない」ことを主張した。彼は、レーニン時代に存在した学術的機関の伝統に立ち返ることで、文化財の恣意的破壊を食い止めるよう訴えた[63]。

---

59 Охрана, реконструкция, реставрация и консервация памятников древнерусской культуры: основная лит. на рус. яз., изд. в СССР в 1917–1974 гг. / сост. *Куйбышева К.С., Степанова М.Г.* // Памятники культуры. Новые открытия. Письменность. Искусство. Археология: ежегодник, 1976. М., 1977. С. 376–377.

60 1965 年 12 月に発足するソ連閣僚会議付宗教問題評議会（Совет по делам религий при Совете Министров СССР）の前身。各連邦共和国、自治共和国、地方、州に評議会および全権代表をおき、宗教に関連する一連の法令遵守の徹底などを任務とした。

61 Latvijas Nacionālā arhīva Latvijas Valsts arhīvs, 1452. f., 1. apr., 23. l., 42–43. lp.

62 Российский государственный архив новейшей истории (РГАНИ), ф. 5, оп. 55, д. 49, л. 39–44.

63 ГА ВО, ф. 422, оп. 1, д. 903, л. 7–9.

1963 年 2 月には、ソ連芸術家同盟（Союз художников СССР）が党中央委員会付属宣伝部に対し、「ロシア連邦内のいたるところで貴重な古代の絵画や建築がむやみに破壊・略奪されている」ことに危惧を表明する文書を送った。具体的に挙げられているのは「ノヴゴロド、ラドガ、ヤロスラヴリの［地方］独自のフレスコ画」、「フェオファン・グレク、ルブリョフ、ディオニシー」らの絵画、ヴィテプスク市（ベラルーシ）やチェルニゴフ市（ウクライナ）の教会であることから、「古代の絵画や建築」とは宗教画と教会建築に他ならないことが分かる。一方、ロシアに先立ってグルジア（1959 年）とアゼルバイジャン（1962 年）では、「民族文化の遺産」を保護する目的で、共和国単位の史跡・文化財保護の任意団体が結成されていた。これらの組織が成功裏に会員を増加させ、文化遺産修復のための資金を確保していること、またその活動が多くの市民を惹きつけ、労働者らに「美的教養」を与え、若者たちに「祖国の多民族的芸術遺産への愛と尊敬」を呼び起こすものであることを示唆して、ソ連芸術家同盟は全ソ（Всесоюзное）文化財保護協会の結成を提案した [64]。これに対して宣伝部副部長 A. ロマーノフ以下は 3 月、「かような協会は共和国単位で組織されるのが妥当であり、全ソ協会の創設は時期尚早である」という結論を下して提案を却下した [65]。

同年 5 月、ソ連平和擁護委員会（СКЗМ）の文化交流委員会メンバー、歴史家 N. ヴォローニン、画家 P. コリン、建築博士 P. レヴャーキン他 5 名の連名で党中央委員会総会に提出された同様の提案書では、地方行政が「史跡保存問題を社会主義建設問題と、またイデオロギー方面ではこれを反宗教プロパガンダと対置させ」、恣意的な史跡破壊を行っている現状が憂慮された。広大な領土をもつソ連で、文化遺産を効率的に保護するためには、「中央集権化された強力な国家組織」が必要であると彼らは訴えたが、こうした組織がレーニンの時代には機能していたことが繰り返され、史跡・文化財保護の分野においてもレーニン主義への回帰が重要であることが強調された [66]。しかしこれを受けた当時のイデオローグ、党中央委員会書記の L. イリチョーフは文化畑の V. クハルスキーに対して「あなたの意見は？」と打診するにとどめている [67]。

こうした提案を受けた党官僚が、否定でも肯定でもない曖昧な態度に始終していた反面、史跡修復事業への支援を求めたバラノフスキーらの請願を、1964 年の末頃フールツェヴァがすげなく拒否したという回想がある [68]。この回想と矛盾するようだが、先述のように、その前年の 1 月には、フールツェヴァは文化財保護協会の全ソ規模での決定を求めていた。この文書は、ソ連芸術家同盟ならびにソ連平和擁護委員会による 1963 年 2 月と 5 月の投書に先立つものであるが、これらと同様、文化財保護のための市民組織がソヴィエト人の美的、イデオロギー的教育に及ぼす効用が指摘されており、史跡破壊の現状やソ連全土における修復組織の状況に関する部分を、ヴォローニンがロシア共和国文化省に提出した先述の報告 [69]

64 РГАНИ, ф. 5, оп. 55, д. 49, л. 143–144.
65 РГАНИ, ф. 5, оп. 55, д. 49, л. 145.
66 РГАНИ, ф. 5, оп. 55, д. 49, л. 53, 58. さらにこの投書では、革命や内戦、大祖国戦争のモニュメントや史跡も保存の対象として言及された。
67 РГАНИ, ф. 5, оп. 55, д. 49, л. 50.
68 *Трофимов А.С.* Подвижник // Петр Барановский. С. 183–188.
69 ГА ВО, ф. 422, оп. 1, д. 903, л. 1–15.

に依拠しながら説明している。さらにグルジア、アゼルバイジャンの先例から、市民の協会納入金を修復費用に当てられる利点を挙げているという点でも、知識人たちの投書と酷似している。

革命直後から文化遺産の保護と利用に関わってきたのは、党・政府官僚以上に、建築家・画家・芸術史家・歴史家といった専門家であった。最終的な決定権は党・政府官僚が掌握していたとしても、この事業をイデオロギーの枠内で展開していくためのレトリックを作り上げ、提議を行うのは、知識人に委ねられた役割だった(70)。専門知識をもった知識人たちは、党・国家機構に対抗する形で外部から自分たちの訴えを発信したというよりも、その一員として内部から問題提議を行っていた側面が指摘できる。政府は彼らの訴えを吸収しながら、文化財保護運動における主導権の掌握を画策していたと考えられるのである。

### (4) 小括

従来のロシア・ナショナリズム研究が文化遺産保護問題を取り上げる際、その分析は1964年の「ロージナ」発足にさかのぼるのが通例であった。そのため、学術的・芸術的な興味関心によって革命前後からこの問題に携わってきた専門家と、後期社会主義時代の文化遺産保護運動がどのようにリンクしてきたのかという問題は見落とされていた。

「情熱家」であった古い世代の専門家たちは、各人が取り組む対象への探求心と強い熱意ゆえに、献身的な活動を個人的に展開した。彼らの主要な関心は学術研究にあることが強調され、そこにロシア民族の歴史的偉業や特色を読み取ろうという意思が付随したわけでは必ずしもない。ところが、ナショナル・ボリシェヴィズムの台頭は、史跡・文化財を民族意識と結び付け、愛国主義の鼓舞を目指した。結果的に、戦後直後のロシア共和国における史跡・文化財の保護をめぐる環境は1930年代と比べて改善された。そして同時に、狭い専門家のサークルのみならず、多様な知識人層のナショナルな関心を引き付けるより大きな問題へと発展していったのである。1960年代の前半は、古い世代の専門的な調査研究が、新しい世代を巻き込んだ運動へと引き継がれていく転換期として捉えられる。その際、前者が強調したのが学術的見地からみた文化財の価値であったのに対し、後者は建築や絵画がほかならぬナロードの力によって創造された芸術である点をより強く訴えた。そして文化遺産は調査・研究される対象であるばかりでなく、労働大衆や学生を「イデオロギー的・美的に涵養」する媒体として積極的に利用され始めたのである。

また、文化遺産の保護をより大規模かつ組織的に展開するために、知識人たちが取った行動が主に、新聞・雑誌への投稿と党・国家組織に対する投書であったことはすでに見たとおりである。こうした行為は、個人でなされるよりも、連名あるいは何らかの公的組織とその代表者の署名によって提出されることが圧倒的に多かった。歴史家ヴォローニン、画家のコリン、作家レオーノフ、建築家レヴャーキンの署名はきわめて頻繁に論文・投書に現れ、彼

---

70　ブルドヌィは市場経済を欠いた社会において、政治力に次ぐ権力となったのが、経済力ではなく象徴的な権力（symbolic power）、すなわち知識人であったことを指摘し、それゆえに政界では知識人の「囲い込み」が重視されたと指摘している。Brudny, *Reinventing Russia*, pp. 15–16.

らが複数の書類の作成に関わっていたことが分かる[71]。また、これらの論文・投書の主張は「史跡・文化財を組織的に保護せよ」という点に集約される。こうした理由によって、これらの文書は相互参照性が極めて高いものとなった。そこではしばしば同じ事例（たとえば、グルジアやアゼルバイジャンの史跡保護協会への言及、ヴィテプスクとチェルヌィゴフにおける教会の恣意的破壊）が引用され、同様の主張（たとえば、レーニン主義への回帰、イデオロギー的・美的教育目的での文化遺産の利用）がなされる。ここに、**1960 年代後半から展開する史跡・**文化財保護運動が依拠することになるレトリックの萌芽をすでに確認することができるのだが、この詳細については次節で検討することにしたい。

## 3. ブレジネフ時代の史跡・文化財保護運動とイデオロギー

### （1）全ロシア史跡・文化財保護協会（VOOPIK）の結成と権威言説

1964 年 10 月のフルシチョフ失脚は、文化遺産の保護に関する問題を進展させることになった。フルシチョフの方針に対する不満の高まりを受けて誕生した新政権は、史跡・文化財の保護問題に積極的に取り組むという点においても、前政権批判の姿勢を明らかにした。何より、「ロージナ」のような自主団体が出てきた以上、史跡・文化財保護運動を党・国家の統制下に組織する必要性があった。そうした状況の中、1965 年 7 月 23 日付ロシア共和国閣僚会議決議第 882 号「全露史跡・文化財保護任意協会（VOOPIK）の創設について」によって、ロシア共和国内のすべての構成単位（**16 自治共和国、6 地方、49 州、2 都市）に創設協議会**が設けられることが決定されたのである[72]。

ところが、史跡・文化財保護にこれまで尽力してきた知識人たちを差し置いて、運動の主導権は官僚に移った。たとえば、モスクワ市の **VOOPIK 組織委員会に名を連ねた 29 名の役**員のうち、**3 名を除く全員が官僚であった。P. コリン、O. ヴォルコフら 15 名の文化人は、**組織委員会のメンバーの片寄りを『文学新聞』誌上で指弾し、これまでの史跡・文化財の破壊や放置には国家機関に責任があること、それが今になって主導権を握ることは許しがたいと非難した[73]。こうした非難が功を奏してか、**VOOPIK の執行機関である中央評議会には**レオーノフやヴォローニンなど、作家や画家、アカデミー会員なども名を連ねた。

任意団体の創設許可の後も、知識人たちの投書活動は終わらなかった。VOOPIK 創設に関する決議に寄せて、1965 年 **7 月 21 日、ソ連芸術アカデミー**（Академия художеств СССР）、ソ連芸術家同盟（Союз художников СССР）、ソ連建築家同盟（Союз архитекторов СССР）それぞれの代表が連名で、『プラウダ』か『イズベスチヤ』に掲載するための草

71 このうち、ヴォローニンの果たした役割については、以下を参照した。*Формозов А.А.* Роль Н.Н. Воронина в защите памятников культуры России // Российская археология. 2004. № 2. С. 173–180.

72 Постановление Совета Министров РСФСР № 882. От 23 июля 1965 г. Об организации Всероссийского добровольного общества охраны памятников истории и культуры // СП РСФСР, 1965. ст. 101.

73 *Волков О., Дорош Е., Коненков С.* и др. Не очень удачное начало // Литературная газета. 30. 10. 1965. С. 2.

稿「問題のために力を合わせよう」を、党中央員会に対して提出した[74]。さらに同年12月には、党中央委員会幹部会に対して、この草稿と類似の提案が出された。手紙の署名者たちは、革命や戦争の記念碑を整備すること、これらの仕事をレーニン生誕100周年（1970年）、ソ連邦成立50周年（1972年）といった記念の年に間に合わせることが喫緊の課題であると指摘している。手紙には、彫刻家S. コニョーンコフ、ソ連芸術アカデミー代表V. セローフ（1910–1968）、作家L. レオーノフ、作曲家D. ショスタコーヴィチ（1906–1975）など18名の著名人が署名を添えた[75]。

これらの提案で訴えられた主張は、史跡・文化財保護を公的な文脈で語る際に用いるべきレトリックを完成させたものとみなすことが可能である。まず第一点目として、保護されるべき対象として最初に言及されるのが、「栄光の不滅の光輝に包まれた革命と戦争の記念物、一人一人の人間の心にとって大切なレーニンゆかりの場所」であること。二点目として、過去の文化遺産を学ぶという行為は、レーニンの教えに基づくものであること、三点目として、過去の精神的・物質的文化遺産が、労働者の共産主義的教育のために利用されるということが指摘される。最後に四点目として、「我々の史跡・文化財のひとつひとつが（…）すべてのソヴィエト人の神聖なる財産なのである」と述べられていることからもわかるように、ここで呼びかけられるのは「ソ連愛国主義」であること。以下に見るように、史跡・文化財保護運動の重要性が公の場で語られる際に、これらのレトリックは繰り返し用いられることになった。

これらの文言は以下の点で、後期社会主義時代のサブカルチャー研究の先駆A. ユルチャークが指摘した「権威言説」[76]とみなすことが可能である。初期の投書の中で用いられたレトリックは、新聞・雑誌記事で再三引用され、史跡・文化財保護運動を公的な場で展開する際に、繰り返し複製され、急速に拡散していった。ユルチャークによれば、イデオロギー言説は複製を繰り返すことによって儀礼化し、その真偽を問題とする「事実確認的（constative）」な次元は問題視されなくなる。それと同時に言説の重要性は、誰が / どこで / いかにこの言説を用いるかという行為の適不適切を問題とする「行為遂行的（performative）」な次元に移る。文化財保護運動の場合、上に挙げたような言説の内容は、真剣な議論の対象とはならない。VOOPIKの代表などが公の場で用いるために、これらの言説が重要だったのである。

1966年6月8–9日、ロシア共和国各地からの代表者350名ならびに、作家同盟や芸術家同盟などの創作同盟の代表者や画家、建築家、作曲家や研究者、そして党中央委員会とソ連各共和国の政府関係機関の代表を集めた創設大会がモスクワにて開かれた[77]。協会代表に選出されたのは、ロシア共和国閣僚会議副議長V. コチェマーソフであった。創設大会で採

74 РГАНИ, ф. 5, оп. 36, д. 152, л. 47–51. 以下、強調は引用者による。党中央委員会の宣伝部、文化部、建設部では、9月になってこれを『イズベスチヤ』に掲載するのが適当であるという結論を出した。РГАНИ, ф. 5, оп. 36, д. 152, л. 52. しかし『イズベスチヤ』では、該当記事を確認することができなかった。

75 РГАНИ, ф. 5, оп. 36, д. 157, л. 9–13.

76 Alexei Yurchak, *Everything Was Forever, Until It Was No More: The Last Soviet Generation* (Princeton: Princeton University Press, 2006).

77 РГАНИ, ф. 5, оп. 58, д. 48, л. 14–15.

択された規約によれば、VOOPIK は「自発的大衆組織」であると宣言されているが、実際には「政治的組織であり、そのすべての活動は、ナロードの共産主義的教育における史跡・文化財の重要な役割についての共産党の指導に基づいて実行される[78]」ことが前提であった。

VOOPIK 会員は入会金 15 コペイカおよび一年ごとに会費 30 コペイカを払う義務があり、これが協会の主要財源であった[79]。1970 年の全収入 480 万 6 千ルーブリのうち 87％が入会金および会費による[80]。指導部にとっては会員を確保することが活動運営のための最重要事項であり、16 歳以上のソ連邦市民が 10 人以上から成る「初級組織」に加わるか、国営企業、教育機関、社会組織などが「団体会員」として参加することで、自動的に協会会員となるシステムであったため、ソ連の社会団体の例に漏れず、会員数は驚異的に増大した。1968 年にすでに 266 万人（人口の 2.3%）であったのが、1972 年で 721 万人、1982 年には 1477 万人、すなわちロシア共和国の人口の 10.6% が協会会員となった[81]。

史跡・文化財保護運動が公式の場で語られる際には、「権威言説」が繰り返された。まず、史跡・文化財の保護はソ連国際主義（интернационализм）と矛盾しないことが強調された。協会代表の V. コチェマーソフは、創設大会における「VOOPIK の目的と課題」と題した報告の中で「史跡は単に地域的な「ロシア（«российский»）」のものだけでなく、全人類的な関心を喚起するものである」こと、「ロシア連邦［原文ママ］は多民族共和国であり（…）その領内には連邦に属するすべての民族の史跡・文化財が存在している」ことに注意を喚起している[82]。第二点として、プロパガンダの対象となる史跡・文化財が、古くからのロシア的建造物や芸術品よりも、むしろ革命、戦争の記念碑であること。1966 年 5 月 24 日付ロシア共和国閣僚会議決議「史跡・文化財保護の現状と改善方策に関して」では、第一に保存すべきものとして「革命の記憶と歴史のモニュメント、戦没者埋葬地、戦争と労働の栄光の記念碑」が言及されている[83]。

その一方で、この運動のそもそものきっかけであったイコンや教会建築の保存について、公的に言及されることはほとんどなく、レーニン主義や大衆の共産主義的教育、ソ連愛国主義の涵養のために必要な事業としての文化財保護が繰り返し強調された。文化財保護活動に積極的に参加する人々が懸念する問題と、公的な言説はしばしば乖離していた。しかしながら、まさにこの方法によって、人々は党・国家官僚が明確な回答を用意しなかった問題に対し、自分たちの要求を実現させることに成功したのである。

---

78 Государственный архив Российской федерации (ГА РФ), ф. А-639, оп. 1, д. 353, л. 141.

79 Положение президиумом Центрального Совета ВООПИиК о «фонде охраны памятников истории и культуры» от 16 сентября 1966 г. ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 12, л. 24.

80 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 314, л. 5.

81 Материалы к отчетному докладу Центрального Совета ВООПИиК (3–8 июня 1972 г.). Ленинград, 1972. С. 54; Справочные материалы о работе Центрального совета ВООПИиК (1982–1987). М., 1987. С. 81–85.

82 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 6, л. 15–46.

83 Постановление Совета Министров РСФСР № 473. От 24 мая 1966 г. О состоянии и мерах улучшения охраны памятников истории и культуры в РСФСР // Охраны памятников истории и культуры: сборник документов. М., 1968. С. 158.

儀礼的にレトリックを用いた人々には、体制の公認ではないが非合法でもない活動に従事することができた。ユルチャークの言葉を借りれば、「パフォーマティヴ・シフト」[84]、すなわち体制のイデオロギーとの直接的な対立なしに、より多様で変化に富んだ行為に取り組む可能性が開かれたのである。これは、公的な言説を「タテマエ」とし、私的な空間で「ホンネ」を展開したという構図と同じものではない。パフォーマティヴ・シフトの後に起こる言動は、周囲の目を逃れるものではないのである。たとえば、VOOPIK に所属した若者たちによる、教会やイコンの自発的な修復作業は、危険視されるどころか推奨された。1977年に行われた VOOPIK の第三回総会では、会長コチェマーソフが、スヴェルドロフスクやリャザンで、「情熱家（エントゥジアスト）」のイニシアチヴの下、会員たちが自発的に教会建造物の修復に乗り出したエピソードを称賛すべきものとして紹介している[85]。こうした自発的な活動は、VOOPIK 結成当初から観察されていたもので、モスクワ大学物理学部の VOOPIK 初級機関は、1967 年以降毎夏、修道院の修復作業のためにソロフキ島へ向かった。またアムール、レニングラード、コストロマー、ヴォログダ、スモレンスク、ウラジーミル、カレリア、北カフカースなどでも学生たちが修復作業に奉仕した[86]。

ただし、自主性に基づいた行動を展開する可能性が、すべての点で開かれていたわけではなかったことも重要な事実である。ユルチャークは権威言説を額面通りに受け止める活動分子（アクチヴ）と、そのコインの裏面のような反体制派が、党の規約やイデオロギーに束縛されない自由で多様な活動を阻害する存在であったこと、そしてそれゆえにこれらどちらの区分にも属さない「普通の人々」にしばしば倦厭されたことを指摘する[87]。VOOPIK の場合、それは後にナショナリストと呼ばれることになる人々であった。ミトローヒンは、VOOPIK のモスクワ市支部で毎週行われていた、ロシア文化を学ぶ勉強会「ロシア・クラブ」についての回想を挙げて、VOOPIK に集結した「ナショナリスト」たちが、反共産主義的性向（антикоммунистическая настроенность）を持っていたと主張する[88]。

> ［ニーコン派と古儀式派による教会］分裂についての有名な論争を覚えている。アバクームの賛同者がいる一方で、アバクームの反対者がいたが、どちらの側も愛国者（パトリオット）だった。これは、単一のマルクス主義的公式も、単一のマルクス主義的テーゼも抜きの愛国者同士の論争で、マルクス主義なんてそもそも存在しないかのようだった。[89]

84 Yurchak, *Everything Was Forever*, pp. 24–25, 53.

85 *Кочемасов В.И.* Отчетный доклад Центрального совета Всероссийского общества охраны памятников истории и культуры // Материалы III съезда Центрального совета ВООПИиК. г. Суздаль. 26–27 июля 1977 г. М., 1979. С. 36.

86 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 154, л. 11; Dunlop, *The Face of Contemporary Russian Nationalism*, pp. 75–76.

87 Yurchak, *Everything Was Forever*, pp. 102–108.

88 *Митрохин.* Русская партия. С. 317–318.

89 *Митрохин.* Русская партия. С. 321.

しかし、ここで注意すべきはマルクス主義的な思考の枠組みが彼らに欠如していたことが回想されているのであって、それはマルクス主義やソ連体制への賛否を問うのとは異なる次元の問題である。彼らは体制のイデオロギーに対して抗議の声を上げる反体制派だったのではなく、その存在を抜きに、自分たちの関心を追求していた。保護運動の活動家の一部が体制にとって厄介だったのは、彼らがマルクス主義を否定していたからではない。ミトローヒンが引いている別の VOOPIK の活動家は次のように回想している。

> 我々は皆熱血的な愛国者で、全力を挙げてソヴィエト権力を守っていた、当然、愛国主義的な修正を施してではあるが。

彼らは「愛国主義的修正」を加えることを試みつつ、ソヴィエト権力の防衛者を自負していた。文化遺産の保護に積極的に関与していたナショナリストの大半は、体制内的性格を強く持っていた点で反体制派とは異なるが、VOOPIK が表明するマルクス・レーニン主義的世界観を軽視あるいは無視したために、VOOPIK 執行部は彼らの言動に手を焼いた。史跡・文化財保護運動が共産主義の理念に資するものでないのならば、古い文化財を社会的な組織によって保護し利用する理由はなくなってしまう。それどころか、文化財保護運動は共産主義の達成にとって有害なものとみなされかねない。VOOPIK 中央評議会の資料には、次のような危惧の念を読み取ることができる。

> ある種の幹部たちは熱狂的な（ファナティック）傾向の世論に取り組もうとせず、絶対に引き付けておくべき重要な人々をしばしば押しのけてしまう。こうした活動家を扱うことがいかに困難であっても、彼らにきちんと相対して、史跡保護に関する諸問題の正しい評価を教えなくてはならない。[90]

先行研究では、党・国家の側に VOOPIK におけるロシア・ナショナリズムの行き過ぎに対する強い懸念があり、官僚支配による統制が再三試みられたと指摘される。たとえば、ダンロップは、VOOPIK が機関誌や定期刊行物の発行を長らく許可されなかった点を指摘している[91]。1966 年 12 月の VOOPIK 中央委員会議事録によれば、『祖国の碑（Памятник Отечества）』と題する月刊機関誌を毎月 5 万部ずつ刊行することが計画されていたが[92]、これは果たされなかった。しかしその一方で、ナショナリズムと無関係ではありえない、古都や教会遺跡を訪れるツーリズムを奨励する出版物の発行は党の指示を受けて盛んに行われていたし、VOOPIK も活発にこれに寄与した。ウグリチ、プスコフ、レニングラードのガイドブックをはじめ、古都や聖堂の写真集、絵葉書、ブックレット等、1966 年には合計 121 万部の関連書籍が出版された[93]。すでにみたように、古い教会建築や宗教芸術を含む史跡・文化財を保護し鑑賞することは、レーニン主義に適うものであると繰り返されていた。

90 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 154, л. 4. 強調は原文通り。
91 Dunlop, *The Face of Contemporary Russian Nationalism*, pp. 69–70.
92 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 12, л. 39.
93 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 5, л. 63.

すなわちユルチャークの言うパフォーマティヴ・シフトの結果、多くの人々が公然と古都への旅を楽しむことが可能になったのである。以下、この問題についてさらに詳しく検討する。

### (2) 国内ツーリズムの展開と VOOPIK によるプロパガンダ

VOOPIK が目的としたのは、史跡・文化財の調査と保全だけではない。VOOPIK は大衆組織として、史跡・文化財に対する「正しい解釈」を広範に宣伝することにも多大な注意を払った。また VOOPIK 創設大会では、保護の対象となった史跡・文化財の合理的利用が最重要事項であることが訴えられた[94]。創設大会における演説で引用された同時期のロシア共和国閣僚会議決議でも、史跡・文化財を「博物館、図書館、休暇会館、ツーリスト基地その他の文化啓蒙設備として利用」することが規定されており、史跡・文化財は広く大衆に開かれるべきものであることが強調されていた。とりわけツーリズムを介してのプロパガンダは「重大な国家問題」とされた[95]。

戦後のソヴィエト・ロシアでは、「マス・ツーリズム」が著しい発展を遂げた。伝統的にソ連型ツーリズムは、労働者や若者の健全な心身の維持、健康的な娯楽の提供、祖国に関する知見の拡大、文化的素養の向上、そして愛国心の涵養といったイデオロギー・ベースで行われていた。国内ツーリズムに関して、ホテルやツーリスト基地、観光ルートなどの整備・運営を行っていたのは、主に労働組合であったが、1958 年にその施設を利用した旅行者は、前年比 174.7% の 381,500 名に達した[96]。1962 年には労働組合付属ツーリズム・エクスカーション中央評議会（Центральный совет по туризму и экскурсиям ВЦСПС）が設立され、1965 年までに全連邦構成単位にツーリズム評議会が組織され、ソ連全土で大衆旅行を可能にする道が開かれていった[97]。1966 年からは週休 2 日制が導入され、健全な余暇の過ごし方が推奨されるようになった。

史跡・文化財は外国人旅行者を惹きつけるうえでも、重要な観光資源であった。戦後の外国人の旅行者には、代表団などの組織化された特別な旅行だけでなく、大衆的な旅行の可能性も開かれ始めていた。1960 年に約 28 万 9 千人だった資本主義諸国からの旅行者は、10 年後に約 73 万 5 千人に増加した[98]。史跡を巡る旅は、国内向けには「ソヴィエト人の愛国主義」を喚起するものとして、「自分の目でロシアの歴史、建築、芸術を見ようとやってくる外国からの観光客」向けには「ソ連民族の文化について敵が広めた情報の虚飾を粉砕す

94 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 6, л. 15–46.

95 Постановление Совета Министров РСФСР № 473. От 24 мая 1966 г. О состоянии и мерах улучшения охраны памятников истории и культуры. С. 158–187.

96 *Дворниченко В.В.* Туризм в СССР и деятельность советских профсоюзов по его развитию (1917–1984 гг.). М., 1985. С. 80.

97 ただし、ツーリズムのための実際のインフラ整備には、産業省や州、地区レヴェルの行政と調整する必要性があり、この組織に計画力はあっても実行力はなかったという。Christian Noack, “Coping with the Tourist: Planned and ‘Wild’ Mass Tourism on the Soviet Black Sea Coast,” in Anne E. Gorsuch, Diane P. Koenker, eds., *Turizm: The Russian and East European Tourist under Capitalism and Socialism* (Ithaca: Cornel University Press, 2006), p. 283.

98 *Багдасарян В.З., Орлов И.Б., Шнайдген Й.Й., Федулин А.А., Мазин К.А.* Советское зазеркалье: иностранный туризм в СССР в 1930–1980-е годы. М., 2007. С. 94.

る」ものとして重要視されたのである。地方都市では、野外型の博物館・自然公園（музеи-заповедники）が各地に組織され始めた。1950 年代末から、ノヴゴロド、コストロマー、ウラジーミル・スズダリ、ゴーリキー、ヤロスラヴリ・ロストフなどで歴史的建築物を中心とした博物館・自然公園が登場した。

ソ連ツーリズムがイデオロギー重視であったとはいえ、商業的側面が完全に無視されていたわけではない。ツーリズムの整備が「国家収入の極めて重要な項目となるものであり、史跡・文化財に関する将来の学術研究、修復作業、保護の拡大に活用される」ことは認識されていた[99]。知られざるロシアの古都への旅は、外国人から外貨を引き出すためにも重要であった[100]。そのために、**VOOPIK は史跡の保護だけではなく、宿泊施設や飲食店、ツーリスト**基地の整備、お土産品の製造販売などにも関心を払った。さらに、国内外の旅行者たちに利用しやすいツーリズム・ルートを策定することが、**VOOPIK 創設の早い段階から計画され**ていた[101]。「黄金の環（Золотое кольцо）」をはじめとして、ヴォログダ、カレリア、アルハンゲリスクを巡る「北の環（Северное кольцо）」、モスクワ、トゥーラ、オリョール、ペンザ、カルーガなどの中央地帯における文豪ゆかりの地をたどる「文学の星座めぐり（Литературное созвездие）」、さらには「偉大なロシアの川」ヴォルガ流域圏を旅するルートや、北カフカース、ウラル、シベリアなどの周遊ルートも構想されていた[102]。

**1968 年 11 月の VOOPIK 中央評議会幹部会では、建築・絵画・民衆芸術セクションの長**官を務めていた建築家の **P. レヴャーキンが、「黄金の環」の構想について報告した。それに**よれば、ソヴィエト・ロシアの自然、歴史的文化財は国内的にも世界的にも観光資源として大きな魅力を持っているにも関わらず、交通の便が悪く、展示のレヴェルもまちまちで、ツーリストのための設備も不十分である。「黄金の環」は、これらの場所を自然公園・保護区として円状に結び、様々な交通手段を用いて周遊するものであった。「黄金の環」は主に北東ルーシの故地を訪ねるもので、レヴャーキンの報告には以下の都市や村落が挙げられていた。

- **ヤロスラヴリ州：ペレスラヴリ・ザレツキー、ロストフ・ヴェリーキー、ボリソグレプスク、**ヴォシチャージンコヴォ村、ウレイマ村、ウグリチ、ムィシュキン、トゥターエフ、ヤロスラヴリ、トルガ［旧男子修道院］、カラービハ［ネクラーソフ博物館］
- **コストロマー州：コストロマー、クラースノエ［ヴォルガ河岸集落］**
- **イヴァノヴォ州：プリョス、イヴァノヴォ、シューヤ、ドゥニーロヴォ村［11 棟の聖堂］、**パレフ、ホールイ［イコン製作］
- **ウラジーミル州：ムスチョーラ［イコン装飾］、スズダリ、キーデクシャ［12 世紀のボリ**スとグレブ教会］、ウラジーミル、ボゴリューボヴォ、スンギーリ古代遺跡、ヴャーズニキ、

99 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 144, л. 34.
100 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 6, л. 15–46.
101 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 6, л. 15–46. モスクワとモスクワ州以外で列挙されている都市は以下の通り。レニングラード、ウリヤノフスク、ヴォルゴグラード、ウラジーミル・スズダリ、ヤロスラヴリ・ペレスラヴリ・ロストフ、イルクーツク・ブラーツク、オルジョニキーゼ、バルト海水路（Балтийский водный путь）。
102 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 353, л. 136–137.

ピロヴォ古代遺跡、ゴロホヴェッツ、グーシ・フルスターリヌィ、ユーリエフ・ポーリスキー、アレクサンドロフ

➢ モスクワ州：モスクワ、ザゴルスク[103]

これらの中には、かなり小規模の農村や集落が含まれているが、そのほとんどが革命以前に貴族や商人たちの寄進によって建てられた聖堂や修道院を擁していたか、イコン芸術に代表される手工芸品などで知られた土地である。同時期には「農村派作家」の作品が盛んに出版されており、彼らが大きな影響力を及ぼしていた**VOOPIK では、村落部と昔ながらの景観の保護が喫緊の問題と受け止められていた。**「黄金の環」創設に関して、1968 年 12 月に開催された VOOPIK 中央委員会建築・歴史部会の会合では、建築の専門家らが具体的な問題について議論したが、「黄金の環」を構成する要素の一つとして自然景観を加味することの重要性が強調された[104]。

> 史的建築物も個々の町々も、ある種の風景、景観を背景にしてこそ美しい。［作家 O. ヴォルコフの発言］

> この環を巡るツーリズムへの参加者すべてが、（…）中部ロシアの平原の芸術的・感情的な価値を感じ、単に個々の史跡の周囲にあるだけでなく、モスクワの城壁を出てから、そこへ帰るまでの全行程を貫いて存在する自然を感じられればいいと思う。［地質学者 O. クノブロックの発言］

「黄金の環」に組み込まれた名所旧跡の多くは教会建造物で、**VOOPIK の資料で指定されている 133 の史跡のうち 95 棟（71.4%）を宗教的建造物が占めた**[105]。宗教を「民衆のアヘン（дурман народа）」、「過去の遺物（пережитки прошлого）」とみなす無神論や、産業化や都市化を標榜するマルクス・レーニン主義を否定することなく、教会や鄙びた農村の景観、手つかずのロシアの自然を肯定的に評価する際に、VOOPIK **は新しい言説を必要とした**のである。

### （3）民衆文化としてのロシア正教

**VOOPIK 指導部は、宗教的要素を内包した史跡の保護・プロパガンダへのアプローチに**は特別の注意を払う必要があることに、創設当初から意識的であった。**1966 年の VOOPIK** 創設大会では次のように述べられている。

> 宗教が長きにわたって支配的イデオロギーであった時代、芸術的創作が教会法によって規定された時代に、中世ロシア芸術は誕生した。しかしこうした条件下で、ナロードの手によって建築、絵画、

103　ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 144, л. 28. ただし、現在まで「黄金の環」に含まれる町や村に厳密な定義はない。

104　ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 207, л. 50.

105　ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 207, л. 97–98. ただし、この表にはモスクワ、ザゴルスク、コストロマーなどは含まれていない。

> 工芸が創り出されたのであり、それらは芸術的な完全性を備え、深遠で民衆的で人間的な意義に満ちていた。これらの作品に結び付けられた宗教的威光を拭い去ってしまいさえすれば、これらが偉大な芸術的財産であること、ナロードの傑作であることがおのずと明らかになる。（拍手）[106]

「宗教芸術＝ナロードの才知」という解釈は人々の感情に訴え、想像力を掻き立てる力を持っていた。しかもこうした言説は、マルクス・レーニン主義的なイデオロギーに真っ向から対抗するどころか、その一部（「大衆」、「労働」、「愛国主義」）を引用していた。そしてそれゆえに、繰り返し模倣された。例えば、史跡・文化財保護の現場であった博物館・自然公園では当然、科学的無神論に従った展示やエクスカーションが行われたが、こうした活動を行っていた学芸員やガイドは、宗教文化財を民衆文化とみなす語りを積極的に内面化し、それを伝えることに尽力した[107]。宗教的文化財は民衆の労働の精華であり、ロシアの民族的遺産であるという言説は、博物館のような啓蒙の場にあっても一般化したのである。

ただし、宗教文化を「ナロード」や「愛国主義」という文脈で評価する解釈が常に許容されたわけではない。ブルドヌィによれば、行き過ぎた愛国主義に対する抑制と攻撃が、1971–73年にかけて観察された[108]。攻撃の立役者となったのは、ペレストロイカ期にゴルバチョフの片腕として活躍することになるA. ヤーコヴレフで、当時は党中央委員会宣伝部の副部長の地位にあった。ヤーコヴレフは、1972年11月の『文学新聞』で、「農村派作家」が他者の悪意や冷徹な機械のイメージと結び付けて都市を描く一方、イコン、十字架、教会といった宗教的シンボルを美化し、空疎な精神論やモラルを説いていると警告した[109]。

この批判を先取りするかのように、1972年7月に行われたVOOPIK第二回総会でも、これまでの宗教文化＝民衆（ナロード）文化の図式を真っ向から否定する発言がなされた。

> すでに命脈を終えた民族文化、教会・封建様式の諸要素を、芸術の民族的形式として理想化しようという試み、古くさいことばづかいの愛好、現実の無視―こうしたことは、社会主義的諸民族文化の形成過程とは何ら共通点を持たないものであるということをはっきりと宣言しなくてはならない。（…）我が国は大衆無神論国家となったが、一部の人々はいまだ、偏見や迷信、宗教的イデオロギーの影響下に置かれ、そうしたイデオロギーを社会主義の条件や文化と科学の達成に適応しようと試みているのだ。また一方で、ある種の芸術作品や文学作品、社会・政治評論に、宗教的な古物や儀礼を理想化する態度が許容され、宗教や教会を弁護し、これらを進歩の味方、文化の熱心な擁護者と偽り、ナロードの歴史におけるその役割を事実無根のままに過大評価しようという試みがなされているのである。[110]

---

106 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 6, л. 15–46.
107 高橋沙奈美「『停滞の時代』のソロフキ国立歴史建築博物館・自然公園：失われた修道院をめぐる親密圏・公共圏の語り」『ロシア語ロシア文学研究』日本ロシア文学会、第39号、92–99頁。
108 Brudny, *Reinventing Russia,* pp. 94–102.
109 *Яковлев А.* Против антиисторизма // Литературная газета. 15. 11. 1972. С. 4.
110 ГА РФ, ф. А-639, оп. 1, д. 353, л. 146.

しかしこうした攻撃は、1973年4月の党中央委員会総会で出された決議によって批判され、この後ヤーコヴレフは中央委員会を解任された[111]。

ヤーコヴレフらが懸念したとおり、文化遺産に向けられる肯定的なまなざしは、正教的精神の評価へとつながることがあり得た。1981年、カレリアの地方誌『セーヴェル』では、VOOPIK会員で建築家のV. オルフィンスキーが次のような回想を残している。

> 大祖国戦争の時に占領下におかれたザオネージエに残ったD. G. サモイロフ老人という農民の献身的行為がしばしば思い起こされる。（…）占領軍が退却する前に、ムノゼルスカヤ礼拝堂からイコンを持ち出そうとしたことがあった。彼は体で入口をふさぐと「やらんぞ！」と言った。そして十字を切ってこう付け加えた。「わしら正教徒の祈る場所がなくなってしまうじゃないか！」[112]

当初、宗教的文化財に向けられていた肯定的な解釈は、このような形で拡大可能であった。そこではまさに、素朴で一徹な精神性、献身、従順といった精神的な価値と正教とが肯定的に結び付けられた。民衆の精神的支柱としての正教の評価は、そもそもの発端であったソ連愛国主義を曲解しがちであったため、体制からの懐疑的なまなざしに晒されていたにもかかわらず、多くの人々を惹きつけ続けたのである。

### （4）小括

以上みてきたように、VOOPIKは「権威言説」を繰り返し用いることで、教会芸術を肯定的に評価し、保護・利用することに多くの人々が公然と携わることを可能にした。VOOPIKが総会などの公的な場で宣言するのは、革命や大祖国戦争の記念碑の整備と保全であり、実際そのための活動もなされていたが、より大きな関心を引き付けたのは革命以前の史跡・文化財であった。VOOPIKの目的が共産主義的教育やソ連愛国主義の涵養にあることを繰り返すことで、革命以前の文化遺産の保護もまた、VOOPIKの重要な活動として、公的に行われることが可能だったのである。

さらに、教会芸術や歴史的遺跡の保たれた都市・農村へのツーリズムの促進は、同時期の国家的事業であり、VOOPIKはこれに大きく寄与した。多くの場合、宗教的要素を含む史跡・文化財がこれらの観光地の魅力であり、宗教芸術の肯定的評価とマルクス・レーニン主義的世界観と無神論が矛盾なく併存するために、ロシア正教はナロードの文化、ロシア的良心と読みかえられた。ナショナリズムに結び付くこうした見方は批判を免れなかったが、多くの人々に共有された。ロシア正教の文化遺産を宗教的な信仰の対象としてではなく、民衆文化の粋として、さらには愛国主義的な崇拝の対象として捉えるまなざしは、このようにして形成されたのである。

---

111　Brudny, *Reinventing Russia*, p. 100.

112　*Орфинский В.* Можно ли спасти памятники русского Севера // Север. 1981. № 7. С. 93.

## おわりに

後期社会主義のソヴィエト・ロシアで展開した史跡・文化財保護運動は、複合的な性格を持っていた。運動の中心的組織であったVOOPIKとは、ある一面で官製の社会団体であり、ソ連マス・ツーリズムの推進母体のひとつであり、また別の一面でラディカルなナショナリスト／愛国者の活動拠点であっただけでなく、革命以前の文化遺産に対する人々の個人的な興味関心を、ツーリズムを通じて広く展開することを可能にした組織であった。

保護すべき文化遺産あるいは史跡・文化財として、教会建築や宗教芸術を国の保護下に置くにあたって、文化財保護のイデオロギー的正当性は時代によって変化した。都市化・産業化が支配的理念であった1920–30年代には、教会建造物は「過去の遺物」としてほとんど顧みられず、学術的価値が認められた一握りの対象が名目上保護されたにすぎなかった。革命以前に誕生した旧世代の知識人たちは、文化遺産の美的価値や歴史的価値を訴えつつ、献身的な「情熱家」としてイニシアチヴを取り、保存事業に打ち込んだ。ナショナル・ボリシェヴィズムが時代の趨勢となると、歴史的な文化財に愛国主義的な色彩が付与され始める。フルシチョフ時代の急速な都市化によって、古い建造物の多くが危機的状況にさらされると、建築家や芸術家ら専門家に限らない知識人や、ナショナル・ボリシェヴィズムの時代に誕生した若い世代の注目が急速に集まった。その過程で、文化遺産は学術的な価値であると同時に、またそれ以上に、民族共同体の歴史の記憶、民衆の精神文化と技術の結晶として評価されていったのである。

ただし、史跡・文化財の保護を公的な問題として取り上げ、責任ある組織を作り上げることによって事態の打開を図ることは容易に実現しなかった。党・国家に対する知識人らの再三の訴えにもかかわらず、フルシチョフ時代には、史跡・文化財保護運動の組織化について、明確な回答は得られなかった。VOOPIK創設はブレジネフ政権による前政権批判、さらには若者による自発的な運動の統制を目的として認可されたが、その際、古い建築や芸術は保護の対象としてほとんど言及されず、代わってVOOPIKの活動を正当化する権威言説が、儀礼的に反復された。それはつまり、レーニン時代の伝統に基づき、ソ連愛国主義の高揚と労働者の教育を目的として、革命や大祖国戦争の史跡とモニュメントを中心に保護活動を展開するというものであった。

ただし、権威言説は事実確認的な次元で、つまりその内容や、それに対する忠誠度の真偽が重視されることはほとんどなかった。権威言説を適切な場で適切な時に儀礼的に用いることによって、VOOPIKの活動家たちには、個人的な関心に基づいて、文化遺産の保全に関わる活動を展開する可能性が開かれたのである。その中には、ラディカルな愛国主義の表明が含まれることもあった。党・国家はVOOPIK内部でソ連愛国主義というイデオロギーの内容が問われ、ロシア民族主義が過分に増長することを恐れ、VOOPIKの活動を統制していた。一方で、革命や戦争の記念碑の重視といった権威言説が適切に用いられる場合には、より多様で自発的な活動の可能性が開かれていた。そしてそれは、秘密裏あるいは私的に行われるものではなかった。革命以前の文化財や教会建築は、無神論国家であるソヴィエト・ロシアにおいて、公的な保護の対象となったのである。観光ルート「黄金の環」に代表されるロシアの古都をめぐるマス・ツーリズムが、この時期に花開いたことはその明らかな証と

いえよう。後期社会主義時代の史跡・文化財保護運動に参加した人々は、ソ連愛国主義というイデオロギーの下、学術的関心からナショナリストに至るまで立場を大きく異にしていたとはいえ、ロシア民族的、正教的文化に対する肯定的なまなざしを広く共有することが可能であった。こうした見方がソ連崩壊後のロシアにおける宗教観にも影響を及ぼしていることは非常に興味深い問題であるが、これについては別の機会に譲りたい。

# Развитие движения охраны памятников истории и культуры в Советской России: из индивидуальной работы энтузиастов к созданию общественной организации «ВООПИиК»

**Такахаси Санами**

В данной статье рассматривается движение за охрану памятников истории и культуры в Советской России. В период позднего социализма (1953–1985 гг.) культовые архитектурные сооружения впервые за советское время стали рассматриваться как имеющие «ценность» для общества. В это время большая часть исторических храмов и монастырей, сохранившихся до того времени, была включена в список «памятников истории и культуры», находящихся под государственной охраной.

Предшествующие исследования движения за охрану исторических памятников проводились с точки зрения изучения русского национализма и патриотизма, фокусируясь в основном на изучении его развития в период позднего социализма. Поэтому на социальные изменения, позволяющие развертывать данную деятельность на широкой общественной арене, было обращено недостаточное внимание. В данной статье анализируются события более длительного срока, что позволяет выяснить многообразные черты данного движения.

Советская власть разрешала сохранение культовой архитектуры только в рамках общего идеологического курса, который требовал серьезного обоснования и оправдания охраны церковных зданий. В 1920–30-х гг., когда общество было устремлено к достижениям научного прогресса и самой науки, культовые здания считались «пережитками прошлого». Лишь некоторые ученые-энтузиасты находили в них эстетическую и историческую ценность, взяв на себя инициативу в деле охраны памятников старины. Когда в канун Второй мировой войны в Советском Союзе начали подчеркивать героическую историю русского народа и историко-культурные связи разных народов СССР, то памятникам старины стало придаваться патриотическое значение. Когда власть в период правления Н.С. Хрущева приступила к коренной модернизации городов, разрушая при этом их старый исторический облик, не только специалисты (искусствоведы, реставраторы и др.), но и многие представители интеллигенции и молодого поколения стали обращать внимание на судьбы исторических памятников.

Несмотря на неоднократные предложения о создании общественной организации по охране памятников, советская власть долго не давала ясного ответа. Только в июле 1966 г. было организовано Всероссийское добровольное общество охраны памятников истории и культуры (ВООПИиК). Согласно уставным документам, ВООПИиК являлось официальным «добровольным обществом», хотя руководство общества неоднократно подчеркивало, что «ВООПИиК—организация политическая, и во всей своей работе руководствуется указаниями коммунистической партии о важной роли памятников истории и культуры в коммунистическом воспитании нашего народа». При этом в обществе подчеркивалось, что основное внимание должно было уделяться памятникам революции и Великой Отечественной войны, которые, как считалось, поддерживали дух советского патриотизма. Вместе с тем, интерес к

движению ВООПИиК у общественности прежде всего был связан с памятниками дореволюционной архитектуры и живописи, также способными развивать чувство патриотизма.

Вместе с тем, одной из целей ВООПИиК являлось эффективное использование памятников истории и культуры в целях массового туризма. Важную роль стали играть новые туристические маршруты, например, «Золотое кольцо», «Северное кольцо» и т.п., которые показывали советским и иностранным туристам русскую равнину, памятники деревянного зодчества, золотые церковные купола, одним словом, «традиционный русский пейзаж». Тогда памятники культового характера стали считаться «искусством народа». В 1960–1970-е годы в обществе и руководстве страны происходит существенная переоценка отношения к сохранению памятников церковной архитектуры.

Среди членов ВООПИиК сложились движения как с радикальными представлениями об охране национальной традиции, так и с интересом к русскому народному искусству, которое многим членам казалось новым и привлекательным. Таким образом, деятельность ВООПИиК имела многоуровневый характер. А положительная оценка памятников истории, культуры и традиционной народной духовной культуры (т.е. православия) распространилась не только в скрытом кругу радикальных патриотов и русских националистов, но и в среде интеллигенции и молодого поколения.